特201
966
本一愚誠憐讀
正幸甚

333

# 時艱克服 草莽の聲

2

*0001948000*

0001948-000

特２０１－９６６

草莽の声

月出東山・述

壱誠社

昭和１６

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

時201
966

時報
克服

# 革命の聲

月出東山述

壹誠社刊

清浦老伯題字

## 叙

（轉載）

（前節略）奎堂清浦伯稱揚曰墨壇異彩非虛辭也

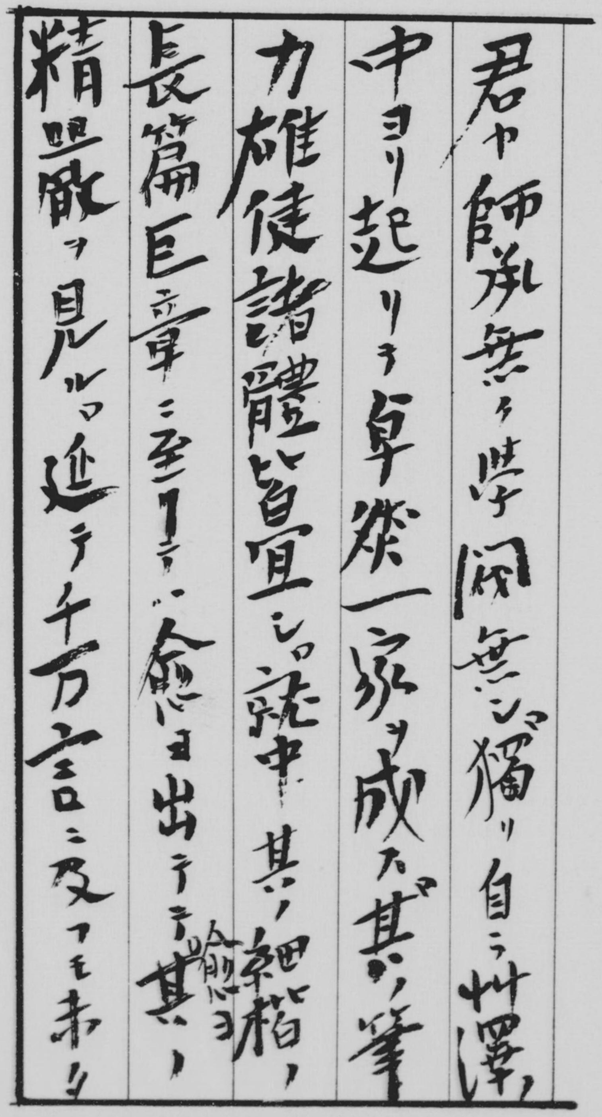
（中節略）雖然東山天資忠敬志業之本領則在尊皇濟世而老來雄心益勃々將創大日本國教會以伸晩節於君國嗟呼東山亦偉傑之士也哉

鳴洲　四宮憲章

## 叙

昨秋「東山一斑」と題する書道帖に賚はりたる德富蘇峯先生の叙文を轉載して卷頭を飾る。

（前後節略）

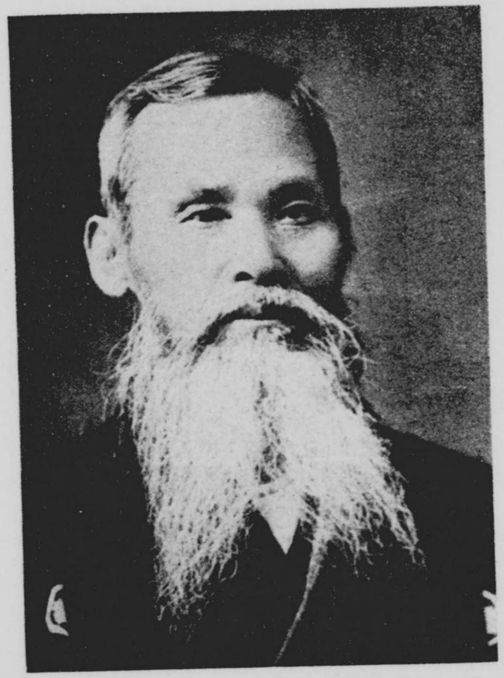


君ヤ師承無ク學問無シテ獨リ自ラ艸澤ノ
中ヨリ起リテ卓然一家ヲ成スヾ其ノ筆
力雄健諸體皆宜シロ就中其ノ細楷ノ
長篇巨章ニ至リテハ愈ヨ出テテ愈ヨ其ノ
精嚴ヲ見ルヿ延テ千万言ニ及フモ未ク

怠弛倦疲ノ色ヲ露サス所謂多ク倍
辭スルモノ君ニ於テ底幾シ其ノ気米
魄ノ深厚ニシテ其ノ素養ノ豊富ニ
其ノ精神ノ凝結シテ其ノ意志ノ剛克
ナルニアラスンハ安ンソ此ノ如クナルヲ得ンヤ
然モ書道ハ君ニ於テ其ノ餘技ノミ君ヤ
敬神愛國ノ士シテ熱烈ナル皇室中心

主義者ナリヤ而シテ慷慨奇節アリ老テ益
壯恒ニ國事ヲ憂慮シテ其ノ寝食ヲ忘ル
乃チ知ル斯ノ志趣アリ而シテ後代ノ筆力
アリトロ

前將德宮正敬力庶
書之



東山、月出氏、名は皓、別に斗牛と號す、（東伊豆狩野鄉の出身にして小山翁り、其の敬神尊皇憂世の念に至ては恐らくは比儔照罕なり、老齢七十九元氣壯者を凌ぐ。）

## 凡例

一、本書は余が第二次近衛内閣を迎へて、素人の時局觀を物し、昨年七月廿三日、皇道日報に寄稿したるものにて回を累ぬること十二。之を前篇と爲す。

一。後篇は本年二月下旬、同紙上に掲載せられ。續稿三回を以て完結を告ぐ。

一、余は七十九の老措大なり、書道を以て身を立つるもの、時局論文を物するの柄にはあらず、故に自ら素人と謂ふ、唯一片耿々の丹志人後に墮ちず、思ふ事言はぬは啻に腹ふくるゝ業のみか、今日の時局を眺めて已むに已まれぬ胸臆の迸發のみ、茲に「東山一斑」より轉載せる德富蘇峯先生の叙文に據りて清鑑あらんことを請ふ。

一、前後二篇、半歲以上も間隔ある別稿なれば、重複せる言議尠なから

ず、加之ならず、簡單に要旨を摘めば一紙半箋尙ほ之を辨すべし、然るに呶々諄々數千萬言に及んで倦まざるは、唯筆者の熱意を諒恕ありたし。

一、固より何等の名論もなく卓說もなく。抽象的疏枝大葉の愚誠を吐露するに過ぎず、獨り最後の結論は自ら謂ふ天下の大論文にして、根本的世界禍亂の克服原理は斷じて此外になしと信ずるものなり。

一、余は第一次世界大戰の當時。「非常時第一義 草莽の聲」と題する一小冊子を公にせしことあり、本書亦た之に倣ひて斯くは名づく。

紀元二千六百一年三月穀旦

著者識るす

# 近衛內閣の出現に一縷の望を屬す（一）

月出東山

石の上にも三年といふ。此の未曾有の時局を料理する政治の樞軸が僅々半年位で摧ける始末で何が出來るものか。米內內閣の總退却を喜ぶと共にモー半年內閣は懲り懲りだ。

落語子は、代りまして代り榮えも有りませんと云ふ、事變以來內閣交迭の跡を見るに全く其通りである。ソコで今度の近衛內閣に限つて、果して代り榮えがあるかどうか、諺に無い袖は振られぬと云ふ通り、事實現代に偉人が無いから、何遍代つたとて代り榮えのあるべき筈がないとの說は一應尤もである。

私に言はせれば大體一君萬民の國體下に於ては、國民擧つて忠良の赤子であるから、一人や二人の和製ヒットラーも和製ムッソリニーも必要がない。唯一億忠良國民を代表する精忠無二の政治家が乃公出でずんばの概を以て其局に當れば可なりと云ふのである。

さて精忠無二の政治家とはどんなものか、事變以來の內閣を眺めても分かるが、彼等は初め大命を拜すれば、必ず伊勢神宮に參詣する、其心は言ふ迄もなく、神前に誠忠を誓ひ一死以て君國に盡し奉りますとの覺悟をキメたに相違なからう。然るに國民の信賴に背いて秕政百出、ホー〳〵の態で逃げ出しても、未だ嘗て神前に馳せ參じて罪を謝し、乃至は割腹して赤心を天下に示した話も聞かない。これは聊か極端な註文かも知れないが、兎に角たとへ失敗しても、其精忠には感服したと云ふやうな話も聞かない。

今の世、近衞公の外にはないと迄、天下の信望が翕然として公に聚るのは抑も何ん



の功德に依るか、たゞ名門とか門地とか云ふだけではあるまい。斯の人なら必ず此の非常時局を料理するだらうとの期待がなくてはならぬ。マサカ和製ムッソリニー和製ヒットラーを以て擬するワケでもあるまい。或は公の閱歷に鑑みて公ならではと思ふ試驗濟の功績があつての事か。私は決して公の前途を危ぶむのではないが、公たるもの須らく深く思を此點に留めねばなるまい、少くとも三日天下の歷代內閣破綻の後を承けて皇國日本の大使命を果たすべく數年以上の壽命を保たれんことを祈る。

由來弱體內閣を製造した責任は元老重臣にありとて攻擊する向きもあるが、私も閣臣の薦奏を元老重臣の手に委ぬるの組織は時代後れの錯誤と思ふ。凡そ天下無事の日に於ては我慢もするが今日の如き國家の運命に關する非常時局に處して磐根錯節を料理するは非凡の逸材を要するのである。此の非凡の逸材は壯年血氣、人間觀觀の傑物でなくてはならぬ、元老重臣の如く概ね皆頽齡にして引つ込み思案の所有者には決して斯かる適材を物色するの頭腦はない。興津の老公へ伺ひを立てるなどは、全く以て

時代錯誤の甚しいものである。此の缺陷は歴然事實が證明して居るから多く言ふ必要はあるまい。

然らば此の重大なる政治機構を如何にせば可なるかと云ふに樞密院といふ御下問に奉答すべき機關がある以上、院内に人物銓衡部を特設して常に閣魔の臺帳見たやうなものを備へ置き、イザ鎌倉といふ時先き立つものは大人物、適材適處の用意怠らず以て大小の御下問に奉答して萬全を期すべきである。勿論平生に於て人物物色の方法に就ては研究すべき問題尠くあるまいが要するに少數の元老、申さば御隱居の分を以て國家最高の樞機に容喙するなどは寧ろ僭上の沙汰と云はねばならぬ。

世俗の人物評なるものを見るにアノ人は善人である。惡い事はやらぬと云ふ。惡事を働く奴は言語道斷であるが善人といふ目標は餘り感心すべきものではない。

孔子も益者三友、損者三友を擧げたる中に善柔を友とするは損なりとなす。善柔とは媚説に工にして諒ならざるを謂ふとあり、媚説に工なる外務大臣は此際眞ッ平ら御免を蒙りたいのだ（呵々）此節善政要望大演説會といふ建て看板を街頭に見て思つた事だが、善政の二字には經綸の意味を含んで居らぬ、善政は猶ほ個人の善柔の如きもので、甚句も唄はず屁もヒラず毒にもならず藥にもならぬ意味多く、アノ人はお人善しといへば馬鹿と云ふに同じである。今日の世界變局に處して國家の運命を拓いて往く大政治家に善政を以て要望するは、要望するものが、未だ時局を解しないものである。今日は五ヶ條の御誓文に宣らせ給へる。盛んに經綸を行ふべき千載の一時である。國民は實に此の經綸の施政に饑うること久しいものだが、近衞内閣は果して能く國民の輿望を飽かしむることを得るや否や、序でながら善政の辯を費して、玆に之を力説して置く次第である。

事變勃發以來、憂國の士、筆に口に言論の沸騰今日より甚しきはなく中には往々正議讜論天下の指導たるもの少なくないものもある、夫れ眞理は一なり、その二あるは眞理にあらず、政府は宜しく此等の忠言を參酌して其眞理を知り、又能く民聲に聽き

民意に從つて本分を盡すの外なきを知らば、何を苦しんでか半歲にして重職を放棄するの醜を學ばんや、人往々其不忠不臣を疑ふも亦故ありと謂はねばならぬ。

## 皇道の振興

苟明大義正人心。
皇道奚患不興起。
斯心奮發誓神明。
古人有云斃而已。

（東　湖）



# 近衞内閣の出現に

## 一縷の望を屬す

## （二）

今の世萬全の偉材を上に戴くの望なしとすれば、セメては能く天下の忠言を聽いて國策適應の眞理に則り斷乎として之を實行に移すの信念と勇氣さへあらば、先づは大誤なき爲政家として信賴するに足るべきか、斯の如くならば、參議などいふ屋上架屋の冗官は廢止して可なり、私は寡聞にして未だ參議ありて危機を救ひ、參議あつて經綸を輔けたることを聞かぬ、近來特に官僚獨善の詬りを聞くが此の惡聞を招く所以は主として民意に傾聽せず、輿論を尊重せざるの弊に基くは不及申、事變以來種々雜多の法規を濫發して徒らに民の煩瑣を購ひ、其の施行する所、概ね實情と背反し、動も

すれば趙括の兵法たるもの多きが爲めにあらずや、是れ畢竟屬僚政治の惡弊に根するものに非ずして何ぞ。大學を出たばかりの若造先生が机上の草案を擔當し、上司之に盲判を與ふるもの多しと云ふ。勿論大臣は唯その大綱に向つて判斷を下すに過ぎず一々細目に通ぜず勢ひ下級吏僚に命じて起案せしむるの外なきにもせよ、一知半解の青書生然たる課長以下の連中が法規の立案に當るとは心細い次第ではないか、故に私は思ふ、政務にも民情にも通曉せる思慮練達の政務官を必要に應じて一省二三名置き、直接大臣に誨ふる位の人材をして此等の要務に任せしむる事とせば其結果自然に官僚獨善の弊を免るゝに至るであらう。

何は兎もあれ、天下の信望を荷へる近衞公が內閣首班として蹶起せられたのは、先づ以て慶ぶべきであらう。公もさるもの必ずや身命を賭しても一代の全力を傾倒して蹇々匪躬の節を盡し、以て聖明に答へ奉るべきである。獨り公のみならず閣僚何れも愚かはなき筈なるも、今日は軍國の秋なれば、陸海軍卽ち軍部の決心覺悟は國民全幅の信賴を負ふて愈々益々發奮する所あらん事を祈つて已まぬ次第である。今度も國民は畑陸相に負ふ所多く、軍部の强力にて弱體內閣瓦解に歸したるを見ても、國民は皆軍部に感謝して居るのである。

日本は戰爭には强いが外交はゼロであるとの定評はいかにも其通りである。然るに今度の外相には我等の松岡先生が据つたゾ。

彼は箸の上げ卸しにも明治天皇の御ミタマを信念とし、一死報國の覺悟を有する此點唯一の人材である。今迄此人を何故外相に据えなかつたか不審であるが、今や愈々其時機到來、天彼をして我がゼロ的外交を刷新せしむるの機熟したるに依るか、米が無い炭がない燐寸がない、砂糖の代りに鹽を賄めろでは銃後の護りも覺束ないではないか。一億一心百億貯蓄を强制しても、聖戰の目的を達するワケには參らぬ。今日は敵の首を取らねば敵に首を渡すの秋である、一か八か待てシバシはない。百億の金を金庫に死藏するよりは、之を充分に活用して國策の遂行に資せねばならぬ。統制々々

で消極悲觀の政策を施し、國民の元氣を萎靡不振に陷らしめてはならぬ。此等の政策を萬全に遂行する爲めには、大藏、商工其他の各省大臣も亦皆それ〴〵に刷新的政治をやらねばダメだ。

今の政治は民をして依らしむるに足らず又民をして知らしむるに吝なるの點に於て實に無能も亦極れりと申すべきである。何故然るかの疑問に對して今後は第一に其解答を國民に與ふべきである。此稿を終るに臨んで一言す、賢宰相出づるを待つて一大國策を獻呈せんと思つて居た私の大論文を近衞公の蹶起に對して、次回に公表する考へである。（それ程でもないが）

# 近衞内閣の出現

## 漸く人意を強うす（三）

事變以來、三日天下にも比すべき短命内閣が交迭に交迭を重ねて何等の成績を擧ぐるの暇もなく、揃ひも揃つて貧困政治の譏り浴び、結局民心に悖戻して退却を餘儀なくするに終り、殊に國策の樞軸たる外交の不振無能に至つては、全く國民をしてウンザリせしめたるは掩ふべからざるの事實である。貧困政治が國民の不安危惧を購ひ人心を倦ましめ、甚しきは怨嗟の府となり、下の上を視ること讐敵の如き感あらしむるもののコレが何んで輔弼の大任を盡すものと云へやうぞ、上御一人の叡慮を惱まし奉るの罪でも實に恐懼至極の沙汰と云はねばならぬ。曾て高等文官試驗の問題に國務大臣

の名を列記せよと云ふのがあつて、之を滿足に答へたものが無かつたとて、常識の缺乏を嗤つた話があるが、凡そ大臣などいふものは千萬人に傑出した大偉人と思へばこそ誰れでも其名を知るべき筈であるが、此節のやうに、變つても變つても變り榮えのない平凡大臣の名などは記憶する必要がないから高等文官の受驗者が答へ得なかつたのも無理ではない、此節のやうな大臣では誰れでも勤まる、斯く云ふ東山でも文部大臣位、いつでも大命を拜すればお伊勢さんへ馳せ參ずる用意があると廣言した事もある。(呵々)イヤ話に力が入つて飛んだ脫線をしたが、ドヽ米內內閣の瓦解は待つてましたと許り、ホツと重荷を卸した心地に引換へて近衞內閣は早くも萬民謳歌の聲津浦々にまで漲るを見るは、先以て久方ぶりで餘飮の下がる心地がする、我等は正直のところ、近衞公が門地の高い點と聰明の點と、品性の點に於て宰相の資格あることを信ずれども、政治的手腕(?)に於ては未知數たるを免れない、故に今日の非常時局を料理して快刀亂麻を斷つの器であるかどうか、例の紈袴子弟アル點少々怪しいものと思ふものから、僅に一縷の望を屬すと題して前回に聊か鄙見を開陳したのであるが、其母豚に臍をナメられると夢みて產れた寧馨兒は、呱々の聲を聞いて既に其の英氣を悟るが如く、殆ど前例のない組閣振りを觀て見るに、泰山崩れ來るも動せぬ愼重の態度を以て、專ら賢能を網羅し、適材を適所に配するの用意オサ〳〵怠るなきの一端に徵するも、未だ以て明目張膽と迄はいかぬも、先づ以てオヤ〳〵と漫ろ敬服の念を禁せず、憶ふに公たるもの此際此秋一代の御奉公を勵み必ずや一命にかけても上聖明の優諚に答へ奉り、下億兆の期待に酬ひらるゝ事を祈る次第である、公の傘下に馳せ參じたるは孰れも皆濟々たる多士であらねばならぬが、中にも外相としての松岡君、商工相としての小林君は現內閣にありて最も新味に富める兩雄と云ふべきであらう。我等は一昨年の秋關西へ旅行し、歸途車中の無聊に堪へず、靜岡邊より東京驛へ著く迄、誰れ彼れを相手と云ふでもなく、車中時局に關する長廣舌を弄して乘客を煙に卷き、お蔭で長時間退屈を免れたる事ありしが、中にも天下の人物論に花を咲か

せ、此の非常時に方りて松岡先生を外務大臣にせぬのは酒宴の席上、酒肴ありと雖も之を食せざるに等し、此の適材ありながら之を滿鐵總裁にして置くのは實に國家の損失である、滿鐵なら小林一三氏で澤山である、彼なられ寶塚を經營するの頭を移して滿鐵を運用すること屁の如きものがあらう。併かし小林の方でイヤだと云ふかも知れぬと云ふ意味の話しをして、乘客一同を成る程ネーと思はせ、中には立派な紳士が名刺を出して御高說を伺ひ誠に有難う御座いましたと共鳴した人も有つたが、いつの時代でも、有爲の人材を拔擢すると云ふことは、容易なものではない、英雄英雄を知り豪傑ならでは豪傑を知るに足らない、今度近衞公の値遇を得た松岡、小林兩君は近衞公だから其幕下に馳せ參じたに違ひない。小林さんには一度も會見した事はないが、アレは只の鼠じゃあんばいと思ふ。わが傳統的ゼロの外交も、松岡先生の出馬ある限り、自今以後は國民諸君親船に乘つた心地で悠々煙草でも吹かしながら、やがて日本丸の彼岸に安著するのをお待ちなさい。

# 近衞内閣の出現

## 漸く人意を强うす

（四）

我等は前回に於て小林商相の人物論に言及したが、三年以前、彼は事變勃發の當初、何かの雜誌で「北支事變は天佑なり」の題下に前途の見透しを立てゝ此れ國運發展の一大轉機であると云ふ一種の卓見を發表したことを、當時身延山に客遊中、人から聞いて、いつも他の意表に出る識見の持主と感心したが、今度又歐洲の動亂は、日本に取つて神風だと多くの人が云ふ、それなら神風に乘じて敵艦へ躍り込み、斫てゝ〳〵斬りまくつた樣に、援蔣第三國を膺懲すべきであるに、ドコを風が吹くかとばかり凉しい顏で何等神風の神護をお受けしないのは現代の士氣遠く弘安の昔に及ばぬのか、我等

は思ふ、今日は神風の僥倖を喜ぶやうなソンな貧弱な日本ではないゾ。ックヾ〳〵世界の變局を觀察するに獨り日本の爲めの天佑や神風でなく、地球面上、國を成す廿一億蒼生の爲めに、天運玆に循環し來つて、新に世界の秩序を釐正し、獸の相食むにも似たる淺間しい功利的私欲的の鬪爭は、やがて人間の娑婆より一掃するに至るであらう事を我等は豫言するに躊躇しない。是れ實に神の攝理の歸結である。我等は名前だけとの約束で、町會から防空副群長の榮職を授けられて居るので此間の防空演習に出役して號令を掛けて呉れろと群長さんが來訪の際、忙しい人を庭に立たせて三十分許り長廣舌を振るつてやつた。曰く八十に垂んたる東山老人に防空自衞の勞務を强ひるは無理だ、イヤ其實は老人元氣壯者を凌ぎ、優に三軍を叱咤するの概あるも、今日日本の空に向つて爆彈を飛ばす無謀の馬鹿者は斷じて無いからモンペー姿の女中を繰出すやうな兒戲に等しい演習は無用である。國防の事は忠勇無雙の兵隊さんに一任すべし、唯穴居の一事は避難の効もあらうが、勿體なくとも皇國々民が穴に隱れるなどは學ぶべき事ではないゾと一喝し群長を烟に捲いて歸したのであつたが、近代戰爭の威力は航空機の發達に在るは言を俟たぬ。元來航空機は白人が日本人の爲めに發明して呉れたやうなもので、短身敏捷リスの如く、死を視る歸するが如き日本の荒鷲に到底對抗する敵はないので、今は先方でも漸く眼が覺めて居る筈である、併し近衞內閣の國策の中には高度の國防と云ふに重きを置いて居るやうであるが、際限もなく國防を强化するよりは、國防をして必要なからしむる塞源拔本的の大經綸を貴ばねばならぬ。それには政治教育、外交、經濟一切を皇道に立脚して體制すると云ふのであるから、近衞公たるもの最も此の宏遠の皇謨を翼贊するの一擧に全力を注ぐべきである。近衞內閣に要望する重大國策は實に此の皇道の二字に外ならない。我等が次回に於て高調力説せんと欲する問題は卽ち是れである。

# 近衞内閣の經綸

## （五）

我等は玆に端を改めて本篇立論の骨子に向つて筆陣を進むることに致さう。

事變以來の歴代内閣が殆ど無爲無能を以て終始した後を承けて第二次近衞内閣、今や天下の信望を負ふて盛んに經綸を行はんと、既に大東亞新建設の脚本を發表に及ばれたが、偖てイヨ〳〵開幕の曉、登場の名優イヤ濟々たる多士濟々を並べて果して能く一流獨特の國劇を演じ、一億民衆の喝采を博せんや否や、其の發表せられた基本的國策大綱の抽象的項目に就ては勿論何人も異存を挾む者はあるまいが、近衞首相の聲明を承つて、我等が最も讃嘆措かざるは聲明した事は必ず實行すると云ふ一事である。願くは尚ほ之に斷の一字を加へて、便々ダラリ小田原評定に流るゝの愚に陷るなからんことを望む。會談にせよ嚴重抗議の申込みにせよ、優柔不斷、曠日彌久、いつ果つべくも見えぬと云ふでは困る。上方の喧嘩で拳を揚げたまゝ一向に之を打ち卸さぬ、此れが從來の内閣に見る所であつた、故に實行はするにしても、速に斷ずることを忘れてはならぬ。

次には政治體制、何々體制と言つても、ツマリ從來の宿弊を刷新して實績を擧ぐるに過ぎぬことゝ思ふが、年來の政黨を解消せしめ選擧法を改めると云ふ一事も流石に近衞公ならではと敬服せざるを得ない。元來一君萬民の國體下に於て黨を建つると云ふのは根本の誤りである。須らく黨名は西の海へ流して了ふべきである。二黨以上相對立し、一方之を建設すれば、他方之を破壞せんとて鬪爭を事とし、而して政治は其の中間に澁滯して徒らに國家民人の累を爲す、又其の選擧も僅に一票の差を以て優劣勝敗を決する如きは其の間情實橫行して正鵠を得べき道理がない。言ふ迄もなく多數必ずしも正しからず百人中只一人の賢者あるも、數を以て爭はゞ九十九人の愚者に制

せられざるを得ず、古人が「群行群止看見識」と規せられたは衆俗却て勝ちを取るの例を道破したものである。代議士勝ちを得たる曉、當選御禮の旗を立て自動車でネリ廻るなど何んたる醜態であらう。一體日本の如き狹い國で、代議士の頭顱三百なぞは多過ぎて弊害あり、一粒撰りの人物はソー澤山あるべきものではない、精々百名內外が適當である。近衞內閣の深慮を煩はしたい。

## 國體

赫々神州、自天祖之命天孫、皇統一姓、傳諸無窮、天位之尊、猶日月之不可踰、則萬世之下、雖有德匹舜禹。智侔陽武者亦唯一意奉上、以亮天功而已、（東湖）輓近西學浸潤、異端邪說漸滋、曰共產主義、曰民主主義、曰社會主義曰何々、咄我神洲唯有日本主義之一而已、此等不逞之徒、凡大八洲臣民、宜鳴鼓攻之也矣。（東山）

# 近衞內閣の經綸（六）

凡そ政治體制といひ基本國策と云ふも、一君萬民の國體と、その國體の由つて起る所の神憲卽ち皇道を以て百般施政の根本義とすることが、元來世界に冠絕せる皇國日本の姿であらねばならぬ、此の第一要諦たる國體精神を忘れて居る所より、歷代內閣が秕政百出の譏りを免れないのである。然るに第二次近衞內閣の出現は皇道に立脚して輔弼の大任を殫さんとするのであるから、果して此の一事を忽諸に附することが無ければ、それこそ經綸的內閣と稱揚すべきである。又松岡外相は前にも申した通り、口癖の如くに明治天皇の御ミタマを信奉する人であるから政黨解消の功勞者として、將た皇道外交家として、近衞首相と水魚の如く意見の契合を見たのは、國家の爲めに

洵に慶ぶべき値遇と云はねばならぬ。日本は戰爭には必ず勝つがいつも外交で負ける
との定評は松岡外相に依りて此の汚名は拂拭せらるゝこと請合ひである。我等をして
言はしめば、皇道日本の外交は外交的工作を用ふる必要はない、皆一視同仁で殊更甲
に厚く乙に薄く、丙に親しみ、丁に疎なるの謂れなく、唯聖旨を體して德化を廣め、
六合一都八紘一宇の皇謨を以て之に臨むのみである。故に不介入も介入もない。勿論
人の喧嘩に飛び込んで怪我を求むるバカはせぬが、喧嘩の相手が我れに向つて敵性を
持つ劍呑ナ奴なら容赦なく介入して打ち懲すべきである。然るに事變以來イナ其以前
から憚りもなく援蔣の邪心を逞しうする爲め我れに對して、終始敵性を挾み、聖戰の
妨害を爲し來つた英國を不問に附し去つて顧みぬ從來の外交は、宋襄の仁と云ふか、
腰拔武士に比すべきか、今や天罰覿面老朽、大英御覽の如き始末で御座い、他の弱身
に乘ずるは聊か日本武士道に背くかも知れぬが此際此秋斷然獨伊を助けて、宿敵狡英
に思ひ知らしめ東亞の癌を掃除し以て平和建設を完了することは、亦一面皇道の神劍



と云ふも不可ではあるまい。此等の成算は業に既に我が松岡外相の方寸に存するは勿
論と思ふ。今一ッ當面の案件はソ聯を如何にすべきかである。或る論者は一種の條約
を締結して彼れに印度進出を容るすも亦一方便と云ふものあれど、印度を許すなどゝ
は、皇道上少しく變ではないか。我等はソ聯の如き我が皇道國體と相容れざる物騷千
萬なる國家とは交際せざるを以て正則となし、假りに當らず障らず朝夕の挨拶位を交
換するに止め、其の代り常に警戒を怠らず、之を監視して、若し我に向つて不逞を及
ぼすと見たら容赦なく膺懲を加へれば足れりである。勿論交際せぬとて強ち戰爭する
必要もあるまいからお互に有益なる物資の貿易をして有無相通ずる位の外交は遠慮に
及ばぬことゝ思ふが松岡先生以て如何んと爲す。次に東條陸相は夙に剃刀大臣の評あ
り、其の兵を用ふる須らく電擊的なるべしの語を聞く以上、必ずや一擧に重慶を屠る
の成算あらんか、宜しく近々の中、蔣さんと宋美齡を虜にして東京に護送し、成るべ
く永く監舍にブチ込み置き臭い飯を與へて靜思反省を促すと共に、特殊の高級教誨師

を任命して、彼に說くに皇道の大義を以てし、我が聖戰の誣ふべからざるを覺らしめ、何故國を賣つて第三國の援助を求め、無辜の蒼生を塗炭の苦に陷れて抗戰今日に至るの愚を演じたるかを追究し、ドド蔣さん恐入つて泣き出すまで寸毫も假借せず、情理兼ね併せて到らざるなく盡さゞるなくんば遂には良心の呵責に堪へずして或は衷心より伏罪せんも亦計るべからず、此の劇的處分は彼を英雄視せる支那人に覺醒を與へ、又廣く世界に對して日本皇道の絶美至貴なる所以を宣揚するの効果がある、然る後生かすと殺すとの處分は隨意たるべし、何れにしても硝煙の應酬はモハヤ近い中に終熄を告げたいものである。

明治天皇御製

草も木も萠ゆるをみれば春風に
うごかぬものはなき世なりけり

# 近衞内閣の使命

（七）

近衞内閣の發表せる抽象的國策の臚列に就ては、批判を加ふべき餘地もなく、隨て相當經綸的含蓄あるを看取するも唯實行如何んと顧みるのみである。又新政治體制と言つても、新に立憲的　天皇政治の根本組織を變更する譯ではなく、要するに五箇條御誓文に明示せらるゝ如く舊來の陋習を破り天地の公道に基いて大小の庶政に於ける種々の宿弊を滌蕩刷新する意味に外ならぬ事であらう。事變以來の内閣が、未曾有の時艱を克服するに方つて、思ひ切つて秘密主義を執り、官僚獨善の誚りに甘んじたのは、是れ斷じて皇道政治の要諦ではない。近衞内閣は深く思を此點に潛め、宜しく民をして依らしむると同時に、又能く之を知らしめ、民の聲に聽き輿論を重んじ、民と

共に國難に當るの赤誠を披瀝すべきである。從來陪食大臣の稱ある文部の政治を重要國策に置き、敎學の刷新を掲げたる橋田文相の聲明は大いに善し、輓近敎育盛んにして愚人愈々多きを加ふるの嘆ありしは、徒らに無用の學藝を授けて最も大切なる人を作るの道を踈かにしたるに由る。併しながら文相の聲明必ずしも新味あるにあらず、曩に明治二十三年十月三十日下し賜へる　明治天の聖諭は國體の淵源、敎育の精華を骨子とし、進んで智能を啓發し德器を成就し、一旦緩急あらば義勇公に奉ずべきを訓へ給へり、斯の道は卽ち皇道なり、古今に通じ中外に施して悖らず以て世界に光被すべきの道たるを訓へ給ふ。近衞內閣の橋田文相は將來如何にして此の聖勅の普及徹底を期すべきかを更に深く考究すべきである。朕惟ふにと餘所行きの聲でたゝ捧讀させるだけでは何んの效果もあるまい。殊に本年の二月十一日紀元の佳節に下し賜へる今上陛下の聖詔は現下の國情に鑑み、民心の作興を規し給へるもの、卽ち紀元二千六百年の佳節に當り、爾臣民宜しく思を　神武天皇の創業に馳せ、皇圖の宏遠にして皇



謨の雄深なるを念ひ、益々國體の精華を發揮し、時艱を克服して國威を昂揚し、以て祖宗の神靈に對へんことを期せよと訓へ給へり、蓋し近衞內閣の根本的國策は、今や新に此の聖訓を奉じて君國の爲めに一大使命を果さん事を誓ふに在るべし。聖詔宣ふ所時艱とは何ぞ恭しく叡旨を拜するに言ふ迄もなく當面の急務は、速に支那事變を戡定して東洋の平和を築き將た興亞の新文化を建設し、延いて皇道を世界に宣布し、萬邦協和、四海同胞の誼を敦うし、以て蒼生の福祉を增進すべく、神武天皇の皇謨六合一都、八紘一宇の天業を翼贊するを以て皇國日本の時局に處する大使命と爲すは炳として日星の如し。抑も此の天業輔弼の大使命を負擔すべき近衞內閣は、果して上御一人の御信任に答へ、下一億臣民の輿望に副ふるの覺悟ありや、我等は次回に於て本篇起草の主眼たる非常重大の問題を提示して結論となし、以て內閣諸公の叱正を仰ぎ、併せて世の識者に質す所あらんとす。

# 近衞内閣の使命（八）

謹で以るに久しぶりで天下の信望を衆めて出現せる近衞内閣だけに言論の士、四方八方より種々の御託を並べて註文殺到するは聊かウルサイかも知れぬが、是れ皆深く望みを現内閣に屬するの結果にして今度こそは勤苦十年流石の首相も鬢髪悉く白くなつたと同情されるやうに是非共有終の美を結んで下さることを願つて置く。

打ち明けて言へば事實人材拂底の今日、若し又近衞公が中道にして投げ出す如き事ありたらんには、愈々以て助かるべき見込がない。故に現内閣の責任や重且つ大なりと謂はねばならぬ。憶ふに首相其人は蒲柳の質にて、過度の勤苦は健康上不安の惧なきにあらず、且つ其性格金挺石橋と迄はなくとも、頗る愼重主義を執り、思案の時間



長きに失するの慨なきにあらず、輕擧妄動よりは優ること萬々なるも、今日の時局は電光石火敏疾の處斷を要する場合多く、悠長は動もすれば機會を逸する恐れがある。仍つて首相に白す、何もかも一遍に埒を明けんとすれば事面倒なり、又何もかも首相自ら立案せねば氣が濟まぬとの噂あるも、千手觀音ぢやあるまいしソハ斷じて機宜を得たるの分別にあらず、焚遲稼を學ばんことを請ふ、子曰く吾れ老農に如かずと內政の小問題など、從來の儘でも差したる不都合なきものは、後と廻しに附して可なり。若夫れ當面の大經大法たる重要國策の方針は自ら定論ありて復た研究の餘地なかるべし、卽ち今の計を爲すもの速に支那事變を解決して興亞の建設に入るの地を作り、他方歐洲の動亂に對しては卽時獨伊と結びて平和の敵たる狡英を閉塞せしめ、然る後ち米國に諭して其分に安住せしめ、ソ聯を誡めて不逞の野望を抛たしめ、大小の邦國各々其所を得るやう、平和の天業に向つて邁往勇進するだけの事にあらずや、熟慮既に盡き今は唯斷行の時なり。近衞内閣智あり仁あり、只勇斷の一事、聊か國民の疑惧す

る所、我等は先づ此の既定の方針に向つて電撃的突貫の實行に移らんことを要望す。現内閣は高度國防の國家建設と云ふ重大國策を掲げて高調力説するが如し。勿論國防が國家の獨立を磐石の安きに保ち武力が外侮を禦ぐの要具にして我が皇國日本の今日あるは、此れ亦威武維れ揚れるの賜たるは言を俟たざるも、治に居て亂を忘れざらんが爲にこそ、國防の必要あるなれ、世界平和萬邦兄弟の誼を敦うするに至らば相共に高度の國防に無益の巨費を糜するの要なし、歴史ありて以來三千載、天運茲に循環して、世界の人類が漸く獸の相食む淺間しき鬪爭より覺醒して緝睦和平を愛好するに至るであらうことは、今日を以て正に一大轉機の劃期時代となし、高度の兵力を逞うするの必要は現下の世局を料理し了る迄の兇器に過ぎない、やがて世界萬邦我が皇道の光被を仰ぐの曉き、各國擧つて國防の施設を減縮するに至るは必然と思ふ。故に今、日本が東洋の盟主たるは不及申進んで世界の導師となりて八紘一宇の皇謨を實現すべき現下の聖戰は、皇國の興廢此の一擧に繫る開闢以還未曾有の時艱であるから、近衛内閣たるものは深く思を神武天皇の創業に騁せ雄偉宏遠なる理想に立脚して、千古不磨の國策を確立することに勗めねばならぬ。併しながら、右聖戰の目的を達成せんことは何等疑惧に及ばず、隨つて其終局を告ぐるは最早時日の問題に迫り來つて居る。此間忠良國民は如何なる困苦缺乏をも忍んで、銃後の奉公を盡すのであるから今こそ高度國防の精神を擴充して十二分に其威力を發揮し、陸相の言はるゝ電撃的效果を收めて、民心の倦怠を醫せしめられんことを切望に堪へざる次第である。

## 國體

（藤田東湖）

日出之鄉、陽氣所發、地靈人傑、食饒兵足、上之人、以好生愛民爲德、下之人以一意、奉上爲心、至於其勇武、則皆根諸天性、此國體之所以尊嚴也、抑所謂勇武者、非惟勁悍猛烈、以逞其威、蓋亦必發於忠愛之誠。

# 近衞内閣の使命（結論）



偖て、重慶を屠り、事變の元兇狡英の罪をたゞして東洋より放逐したら、友邦獨伊と協調して、先づ天下の形勢は雨降つて地固まるべきか、果して然らば此の機會に於て、我が日本の進むべき大使命は　神武天皇の雄深宏遠なる天業を奉體し東洋の盟主、將た世界の先覺者、八紘一宇の導師、近衞内閣一代の鴻圖として、一種御聲明的とも申すべき御詔勅を全世界に向つて渙發あらせ給はんことを奏請し奉るべきである。是れ抑も永久に亘りて皇國日本の大國策大國是、大精神、大主義の宣言たるべきは申す迄もなき所である。

元來前世界大戰當時でも、列國は皆國民の士氣を鼓舞する資料がなくて困つたと云ふ、（海賊のなれの果では始まらない）に引換へ我れは世界に冠たる絶美至貴の國體を有し、赫々たる神憲の皇道、日本主義なる地上無比の大資料を持ちながら未だ曾て海外に向つて碌に宣傳した事もないので、彼等の多くは今以て皇國の皇國たる所以を知らず、たゞ可愛らしい坊ッちやんが成長して戰爭にはバカに強くなつた位に思つてゐる。勿論日清、日露の戰役以來、我が武餘りに揚るの結果、徒らに好武好戰の民族だ、油斷のならぬ侵略奴だ、帝國主義だと怖れを抱くやうになつた迄で日本刀はダテには差さぬ、日本刀は兇邪を挫くの具であると云ふ正義日本魂の眞相を悟らず、故に我れ之を聖戰と言ふも、彼は聖戰の意義を解せず、侵略を聖戰などゝは片腹痛いと思つて居る。勿論我れと彼とは氏素性が違ふから容易に了解し難い場合もあるが、それ故一層了解せしむる必要あるに拘らず、今以て隣邦支那にさへ誤解を受ける始末である。これ強ち政府のみを咎むべきではないが、何んと云つても我が外交の迂濶さ加減は呆れざるを得ないと云ふ外はあるまい。

併しながら、由來言擧げせぬ國といふから宣傳下手は其餘弊かも知らぬが、其代り今度といふ今度は、前後只一遍でよい、前述の如くアル機會に於て歷史上比類なき一大御詔勅の渙發を仰ぎ、皇道國體下の日本主義綱領を世界に宣布して、政治に外交に經濟に文化に、皆皇道に則りて採否取捨するは不及申、特に外交は一視同仁萬邦と協和し、各々國家の康寧と生民の福祉を保つを以て列聖の皇謨とする所以を明かにし、今や神武天皇肇國の御理想たる八紘一宇の天業を實現すべき天の機運に際し、神の攝理に奬順して將來永遠に亘りて獸の相食むに等しき功利的私欲的の鬪爭を人間の娑婆世界より一掃するは人文發達の頂點に到達せる現代人類の飜然として覺醒改悟すべき仁道たる所以を說敎せば、彼等といへども最早判斷に惑ふことも無かるべく、宇內翕然として我が皇道の慈光に浴するに至るべきか、イヤ是非共浴せしめねばならぬ。此の御詔勅は中外に施して千古不磨の聖訓たるべきものなれば、畏れ多き次第なるが、崇高雄偉炳焉として日月と光を爭ひ、煥乎として天地に磅礴するを要するものなれば、聖旨を奉じて德化を廣むるに足るべき粹然神州の正氣を鍾めたる一大文章の顯現を期する爲めには特に有數の文豪若干を一時御用係に任命して、之れが玉成を完うせねばならぬ。されば、現內閣の標榜せる國策の第一重大案たる高度國防の建設は速に當面の時艱を克服し、徐ろに世界の平和を招來する迄の要具にして、言ひ換ふれば我が天皇陛下の御詔勅を以て、世界列國をして八紘一宇の皇謨に浴せしむる爲めの機關に過ぎず。一旦以上の聖旨貫徹の曉にはお互高度國防の建設を競爭して、無益の軍備に莫大の國費を糜するの愚を演ずるの要はない。故に世界平和の聖諭渙發と同時に我が日本が唱首となりて、軍縮會議を提示し、國防を一定必須の程度に縮減して平和の效果を萬全に保持するの計を講ずべきは勿論である。從來幾多の軍縮會議の歷史を迴るに、何れも皆利己的排他的の謀議に出でざるなきは今更問題ではない、畏れながら、皇道の立場よりして純正無垢の軍縮を御提議あらせらるゝは日本天皇陛下の他には斷じて之れ有ることなしと云ふも過言ではない。是れ平和の御詔勅に次いで軍縮會議提唱の

要ある所以なり。

右聖詔の渙發と軍縮の提議とは、時艱克服に次いで當然我が日本が八紘一宇の盟主となりて世界人類の苦惱を救ふべき使命天職を遂行すべきであるが、言ふは易く行ふは難し、斯かる非常の重大問題は賢宰良弼朝に在るにあらざれば聖德を瀆し奉るの恐れあるを以て凡庸内閣に對して望むべきにあらずと雖も、幸なる哉天運茲に循環し來りて、世界の大勢新に人類の平和を招來せんとするに際し、天下の輿望を荷へる近衞公が相當の偉材を閣僚に網羅して至誠奉公の大任を殫さんとするあり、我等は一億臣民と共に篤く現内閣に信賴して、此の雄圖の遂行を視んと願ふものである。眞の日本現下の根本的國策は斷じて此の外にはない、苟も茲に著眼せずして、區々枝葉の小問題に忙殺せらるゝが如きあらば、我等復何をか言はんやである。因に軍縮提議に就ては、曩に國際聯盟脫退の聖旨を體して克く其責任を完うし以て天下の耳目を聳動せしめたる松岡先生今正に外相の位にあり、以て人意を強うするに足るではないか。

# 時艱克服の原理

恭しく惟みるに、今玆に昭和十五年二月十一日の佳節を以て、特に紀元二千六百年を迎へ下し賜へる聖詔の後半に宣はく

今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思ヲ　神武天皇ノ創業ニ駸セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ

と聖旨亦た宏遠雄深、一億臣民孰れか感激せざらんや。顧ふに支那事變勃發以來、玆に三年と二ヶ月を經、巨億の國帑を糜し、無數の生靈を犧牲に供して、今尙ほ一個の蔣政權を葬る能はず、是れ抑も敵軍案外に強きが爲めか皇軍の弱きに由るか、誰れも

敵軍を強いと思ふものもなく、皇軍を弱いと爲すものなかるべし。然り而して當初より我れは長期戰爭を標榜して容易に戰局の終熄を豫想せしめず、元來短氣の我が國民性は聊か倦怠の色あるを禁ずる能はず、つら〳〵既往を顧みて、失ふ所に比して果して幾何の得る所あるか、聖詔宣ふ所、益々國體の精華を發揮し、以て時艱を克服すべき聖戰の效果と見るべきものは何ぞや、聖戰三年以ていかに國威を輝かし、いかに祖宗の神靈に對へ奉ることを得たるか。

殊に不可解なるは、支那は敵にあらずといひ蔣政權は問題にあらず眞の敵は本能寺に在りと云ふ。何を苦しんで斯かる廻りくどい謎見たやうな事をいふか、何故背後に援蔣の元兇英國ありと明言を爲さざるか、街頭打倒英國の立看板所在に現れたかと思へば忽ちにして影を潜むるが如き、以て國論の動搖を卜するに過ぎざらしむ、敵本能寺にありと知るならば、何故に蹶然起つて之を膺懲せざるか。

たま〳〵歐洲動亂の勃發に遭ふや、一部の論者は是れ神風なりとて天の支那事變解決に幸ひするものとして祝福せるは一理あるも、我等は之を以て單に事變解決の便宜とのみ狹義の見を下さず、卽ち世界新秩序建設の爲めの神風なりと斷ずるに躊躇せず。若し我が廟堂の諸公にして果して能く天運循環の歸結、神明の攝理として神武天皇八紘一宇の天業を完遂すべき千載一遇の大轉機を與へられたる時艱克服の原理を悟らば速かに日獨伊軍事同盟を締結し、東西兩洋相應じて世界永久の平和、萬邦一家の基礎を築くべき聖戰の擴充に邁往勇進すべき筈にあらずや。斯くありてこそ、始めて　今上陛下の聖詔に答へ奉るの道と申すべきなり。

事變以來、凡庸內閣の爲す所、上は聖明を掩ひ下は國民を誤り、動もすれば、光輝ある二千六百年の歷史を瀆さんとす、寔に長嘆大息の外なきを悲しむのみ、然る處時なるかな、時至れるかな、上御一人の優諚を拜し、下萬民の信望を荷ひて第二次近衞內閣の出現を見る、其の網羅する所の幕僚亦皆新味ありて人材第一主義に據るが如く、今度こそは代り榮えある非常時的政治を謳歌するの日近きにあらんことを一般國民は

翹望措く能はず、一日千秋の思ひを以て待ち佗び待ちこがれ居る次第なり。然るに組閣以來相當日子を經過せるの今日、未だ何等の福音快報を聞く能はず、たゞ政治體制何々體制と體制づくめの講釋を承るに過ぎず、蓋し庶務一新百度咸な擧らんことを期し、專ら體制の建設に沒頭せらるゝものゝ如し。勿論それも結構には違ひないが、今日は此れいかなる時勢かお分り召さるゝか、火事は疾くに猛焰を揚げて眼前焦土に歸せんとしつゝあり、何よりも先づ火を消すを以て急務中の急となす、體制づくめの研究などは宜しくヒマ人に一任して可なり、由來我が皇國の使命は東洋の盟主として將た世界の導師として萬邦協和四海兄弟の誼を完遂するにあり。此際此秋瞬時も早く聖戰の聖戰たる原理に則り、以て時艱の克服に全力を致さゞる可らず、機會は逸し易く、一步を誤れば由々しき大事逆襲すべし、我等は必しも廟議を譏るにあらず、又諸公の經綸を信ずと雖も、唯一つ缺くる所は斷の一字にあり、熟慮の時は既に去つて今はたゞ斷行あるのみ、夫れ物に輕重あり事に本末あり、火事場に臨んでは火を消すを急務とすること多言を要する迄もなき所なり。

我等の註文は是れにて盡せり、餘計の詮索に似たりと雖も、以下少しく閑話休題將來の爲めに辯じ置くべし。失禮ながら聰明の廟堂諸公にして斷の一字に缺くる所あるは、畢竟平素に於ける宗教的信念に缺くるあるが爲めなり。古より大事に當り難事に處して非凡の涵養、襟度、識見、決斷等の力量を現はすは概ね皆信仰の人に非ざるものなし。試に其の一二の例を擧げて何かの參照に資せんとすれば、先づ〻の一番に神風の本家たる北條時宗は十四歲より禪門に入り、十八歲にして得度し、三十二歲元寇の國難を擔當して、最後の決斷を祖元に質し、從容としてあの如き偉勳を樹て以て祖國を救ふ、德富蘇峯先生の日曜講壇に莫煩惱の一篇あり、冒頭の一節に曰く

「蒙古の兵船、日本海を蔽ふて我國に來寇せんとするや禪僧祖元は莫煩惱の三字を書して北條時宗に與へたりき只だ此の三字彼に取りては恐らくは千軍萬馬よりも有力なる援助たりしならむ、與ふる者も與ふる者なり、受くる者も受くる者なり惟ふに勝敗

の機は鎌倉の幽院松韵稜たるの處一呼一吸の間に決したらむ、豈に夫れ筑紫潟の颶風を俟つて而して後ちに知らんや」と道破し得て高僧英雄の面目、百世の下に躍如たらしむ。今日の廟議多數の委員を羅致して事新しく精誠を誓ひ、連日討論して決するなきもの、果して何んの顔色あるか。後醍醐天皇は芳野行宮に御崩御の際、右手に剣を支へ、左手に法華經を捧げて離し給はず、楠正成は法華經を寫して菩提寺に納めたる當時の文章は現に湊川神社に寶藏せらる(惜いかな寫經は散逸)新田義貞も亦法華經の行者にして兜の裡面へ壽量品中の主眼たる如來秘密神通之力の八字を書きとめたる寶什越前藤島神社に藏せらる、南朝の忠臣比々皆信者たり、加藤清正の佩旗南無妙法蓮華經の嚮ふ所勁敵なきは言はずもがな。維新の元勳山岡鐵舟は夙に三島の禪僧に參じて奥義を修め、鳥尾得庵、中將拜命のとき觀音施無畏の信仰を啓發したるが如き、近くは西洋軍學の鼻祖とも云ふべき江川英龍は代々法華の篤信家たり。又日露戰役に於ける第二艦隊司令長官上村大將(當時中將)も亦熱烈なる日蓮信者たりき、其他宗教界の



人にはあらざるも、乃木將軍は中朝事實に私淑して日本武士道の龜鑑となり、西郷南洲は陽明學を奉じ言志錄に私淑して鐵石の覺悟を練り、東郷元帥の如きも其實は漢學に得る所ありて古武士の風格を養ひ、以て皇國之興廢在此一戰の美名を轟す。之を要するに、古來の偉人概ね皆一種の信念により、以て非常の大事に臨んで懼れず憂へず惑はざるの正道を踏んで疑はざりしを見るべきなり、とは申すものゝ信仰は一朝にして成るものにあらず。到底急造の間に合はざるは勿論なるも將來廟堂の上に立つて君國の爲めに精忠を效さんとするもの須らく皇道に立脚して宗教を修め信仰を固め、以て一死不動の精神氣魄を養ふこと必要なり。現閣僚中松岡外相は西洋仕込みの人にしてタマを信奉する忠孝の權化とも云ふべき大人物なり(他の諸賢の事は知らず)今や此人西洋にカブレず寧ろ反對に渾身是れ皇道を以て充溢し、口癖の如く　明治天皇の御ミ朝に立つあり、國民は親船に乗つた心地にて安心すべしとは獨り我等の私評に止らざ

るべしそれにしては外交轉換の實行、聊か緩慢悠長の嫌なきにあらず、好機は去り易く天運乘ずべし、、外相以て如何んと爲す。

明治天皇御製

空蟬（うつせみ）のよのためすゝむいくさには
神もちからを添ざらめやは

# 時局雜感

（上）

近衞公の懸案たる新體制づくめの各種國策も、いよ〳〵準備委員二十六名の知嚢を網羅し、是からボツ〳〵經綸の具體的建設に進むことであらうが、其れ等の總てが條緒に就て國民の腦裡に徹底し、活用の效果を發揮する迄には、前途頗る遼遠と思はねばなるまい。

我等が前回にも一言した如く、各種體制の經綸も固より喫緊急速を要する問題でもあらうが、今日は將に世界の地圖を塗り換へんとする非常動亂の時局である。一擧焦土に化せんとする火事場の騷ぎに臨んでは、イの一番に先づ其火を消さねばならぬ。何んの邉か悠々消防の講習に銷光する場合であらうや。

今日は何よりも先づ時艱の克服に向つて全力を注がねばならぬ。丸三年越し、牛刀雞を割くに等しき犧牲を拂つて、今尙ほ一個の蔣政權を葬る能はざるは何故なるかの理由が分らぬ。勿論軍政に對して秋毫の不足を憩へるのではないが、眼前屈強の標本たる獨逸を學んで、宜しく電擊的に當面の事變を解決すべきである。勝利を博するは啻に戰爭のみではない、言ふ迄もなく戰捷と共に是れ亦電擊的外交刷新の實績を收むるが刻下の急務である。

國民は皆擧つて松岡外交に信賴して其成を仰いで居るが、聊か悠長さ加減に往々失望の聲を聞き倦怠の空氣が漂はぬでもない。尤も遣外使臣他四十名の當局に招還を命じたのは人事大刷新の雄圖に出づるもので、先づ以て松岡外相の持味を認めるのである。從來列强の一顰一笑に一喜一憂を禁じ得ぬ傳統的柔媚外交を刷新するには、硬骨漢を其局に据ゆるの必要なるは勿論である。併かしながら少くとも人事刷新と同時に痛快に小氣味よく、一日も早く刷新外交の實を擧げるべきだと思ふ可きではないか。

凡そ喧嘩はポカポカツとなぐり附けて早く逃げるが勝ちである。支那事變などゝ輕く扱つて、大規模の兵を動かし、徒らに長期戰爭を呼號して民心を倦ましめたるは、策の得たるものではない。蔣さん又候こゝ迄お出でをキメ込んで奥地へ遁竄する模樣であるが、此際此秋何か奇拔な軍略はないものか、素人考へではモハヤ蔣を生擒りするが如きは一勇士の事のみと思はれるが、果して如何ん。要するに事變截定は近き將來に齎らを告げてもらひたいが、そう早くは問屋が卸さぬや否や。

事變截定と共に進むべき問題は、長期建設である。建設に對する長期は異議の限りでない。我が日本が今日の如く强大となつたのも二千六百年の長期建設である。支那四百餘州の生民をして日本信賴すべしと思はしめ、又實に我が皇道に光被せしめて日滿支三國手を携へて同胞の誼を敦うし、以て各々國家の獨立を磐石の安きに置き新文化の建設を遂行して大興亞の樞軸たる大業を完成せんこと容易にあらず、それには先づ東亞の盟主、三國の兄分たる日本國民は深く自ら反省して己を修め、榮譽ある皇道

國民たるに愧ぢざる態度を以て臨むにあらざれば成立の難き天に昇るが如く、覆墜の易き毛を燎くが如く、折角の鴻圖も忽ち土崩瓦解に終り、第二の事變はいつ勃發せんも亦計られぬのである。此點お互に矜持する所を知らねばならぬ。差詰め占領地に於ける風紀問題を始め大陸へ出動する我が同胞の顰蹙すべきイナ寒心に値すべき惡評少なからぬものあるは長歎大息の外はない次第であるが、今玆に是れ以上を公開するには忍びない。

今回の事變は、日露戰役の幾倍といふ犧牲を拂つて開闢以來の大時艱といふに拘らず、見渡す所、國民全體毫も戰時氣分なく、どこを風が吹くかと云はぬ許りの涼しい顏で濟まして居る。戰地から歸還の將兵が此の體を見て憤慨するのは無理もない話である。ノンキとや云はんか阿呆とや申さんか、併かし是れは第一に、事變に對する國民の無自覺として、相手は高の知れたる支那と云ふ輕侮の念に由る所、第二には海を超えて戰火に遠ざかり、眼のあたり硝煙彈雨のお見舞を受けざる爲め、第三には戰爭に就ての苦勞が足らぬ、第四には長期々々の聲に聊かウンザリの氣味あるが爲めか、勿論一時に熱し易く又忽ち冷却する國民性の然らしむるに由ると雖も、亦以て、ノンキの如く阿呆の如く見えるは、何んと云つても一面國力の强大を物語るものと見て同慶に堪へざる點もある。

戰時下の町會から頻繁に發する廻覽札に就ても、碌に讀む者もなく、次へ次へと廻はすのみで一向に氣乘りがしない、防空演習なども、蜜柑箱へ猫の糞場ほどの砂を盛り、馬穴に水を汲んでお言ひ譯的に門前へ出して置きモンペー姿の女中さんなど面白さうに飛び廻つて居る風情滑稽である。又愛國婦人、國防婦人などゝ銘打つた團章を肩に懸けてゾロゾロ押し出す婦人の行列は、宛ながら長閑の彼岸にお寺參りでもするやうに見えて軍國銃後の護りといふ活氣はどこにもない、要するに多くは皆形式一點張りに墮して、精神の徹底を缺くのは、是れ亦凉しい顏の我が戰時下の反映と見るべきである。物事百般今少しく眞劍味の發露を要求したいと思ふ。

唯聊か寒心に堪へざる問題は米がない炭がない砂糖がない燐寸がないと日常生活に必須の物資が何もかも無い〳〵づくしで、其上に物價の暴騰前日に倍し一般國民の生活を脅やかす一事は未だ曾てお目に掛からぬ苦き經驗であるが、是れとて強ち悲鳴を揚ぐる程でもなく、今にどうにか成るだらうと云ふ。元來何故わが瑞穗の國に米がないか、何故炭がないか、此等の救濟方法を如何にするか、生產を如何にするか、今以て此の何故の問に答を與へて居らぬ、政府は宜しく官報のやうな印刷物を以て、國民の納得するやうに何故の疑問に解答して徒らに危惧する國民に相當の覺悟を與ふべきではないか、闇取引など云ふ非國民の犯罪に就ては罰金は不及申體刑を課しても飽き足らない、宜しく容赦なく片ッ端から銃殺して了へば、一以て百を戒め、忽ち禍根を一掃することが出來る、非常時に於ては非常の英斷を用ふべきは當然である。非常時に非常の英斷を施すことを知つてゐるなら、全國の酒造を禁止すれば米の不足を訴へる恐れはない、酒は一滴の必要もないが、一握の米は尙ほ人命を救ふ必須の食料ではないか、殊に酒造家などは概ね資產があるから、二年や三年營業を禁止されても死ぬ氣遣はない。現內閣には小林商相といふ實業經營の奇才も居るから、此位の事は朝飯前ではないか、他の事と違つて國民の生活を脅威して、銃後の護りを望むといふは望む方が無理である、百事類推して、非常時には非常の英斷を施すことを忘れぬやうに願ひたい。

今度政府がダンスホールを禁止したり、奢侈贅澤を戒むる御法度を出したのは實に機宜を得たるの措置と云ふべきである。奢侈贅澤の戒むべきは强ち非常時には限らぬ、願くは將來永く質實剛健の美風を興すやうに、思ひ切つて徹底的羈絆を加へて頂きたい。今日の非常時に於て、一見世の中バカに景氣がよくどんな高い物でも飛ぶ程賣れ、奢侈贅澤の風巷衢に滿ち、たゞ相競ふて後れざらんことを努むと云ふ、誠に以て怪しからん現象である。是れは言ふ迄もなく軍國インフレ景氣といふ奴で軍需工業家は一躍成金となり、その工場に從業する職工は前代未聞の高級に惠まれ忽ち有頂天となつ

て却て惡風敗俗を釀すこと夥しい現情である。何故軍需工場に爾かく餘分の國費を投ぜねばならぬか、職工風情に過分の手當を給する理由如何んと云ふと議會の質問に似てゐるが、要するに咄々怪事と謂はねばならぬ、今からでも遲くはない、宜しく正中の工場取締に復歸すべきではないか。

明治天皇御製

國を思ふみちにふたつはなかりけり
いくさの場にたつもたゝぬも



# 時局雜感

（下）

我等は昨冬關西へ下り、暮から新年へ掛けて數日の旅行に最も命がけの難澁を極めたるは汽車、電車の混雜なり、三等へ乘れぬ爲め二等へ乘つた迄は善かつたが、忽ち三等のアブレ客が二等車へ殺到して身動きも成らぬ始末、車掌の姿も見えず何等の取締りもなく、唯群衆の蹂躙に委するのみ、恐らく悲鳴を揚げぬ者はなかつたであらう。旅館は概ね滿員客止めタマ〳〵陋室でもあれば暮れの三十日より一月七日迄は宿料二圓增しだと云ふ、來客多くて感謝に堪へず、聊か奉公の一端として二圓を減じますなら聞えて居るが、何故反對に暴利を貪るかと試みに叱つて見たら、そんなら五圓で宜ろしう御座りますと云ふ一例だが概ね皆此の類である。東京市內でも各驛とも人出の

多き日曜日には百五十萬を突破するの勢ひ、肩摩腕擊どころの沙汰ではない。何んとか人間の出盛るのを制限する妙案はないかと心を碎かぬことはない、是れ亦景氣繁盛の反映であらうが、第一此の非常時に好景氣とは咄々怪事と云ふべきではないか。現閣僚には村田遞相其人あり、海と陸との差こそあれ、多年の經驗より割出して、速に交通機關の體制を整へてもらひたい。要するに人多くして車少なきが爲めなら、思ひ切つて車臺の增設を斷行し、定員以外斷じて乘せぬやうにせねばならぬ。

汽車は不及申、東京市內の電車が朝の時間に混雜を極むる醜狀は目も當てられぬ亂脈である。我等八十に垂んたる老人が釣革もなくて宙宇にヨロ〳〵して居ても、殆ど席を讓るものなく、甚しきは靑年學徒にして涎を流して居睡りながら長老の苦境に一顧も與へず、盛んに大飯を食つて運動に體力を練りながら車中一時の安逸を貪るとは何事だ、ソノくせ明治神宮の前を通るときは人並に敬禮して體裁を繕ふなどは滑稽千萬である。我等は自宅を出て澁谷驛に向ふとき、三、四丁の通路一面、男女學生で埋め盡し、而も彼等は縱貫に步まずして橫列に肩を連ねて來るため、勢ひ衝擊せざるを得ない、我等は聲を嗄らし手を戟にして左側へ左側へと叫びつゝ左側通行を敎へてやるを常となす。今日尙ほ左側通行の訓練さへ出來て居らぬ學生を見ては現代敎育の不備を憐まずには居られぬ。

我等の附近に東橫百貨店といふのがある。その食堂は優に一千人を容るに足るべく一日白米十六俵を盡すといへば、其繁昌知るべきなり、老若男女いつも滿客で、子供迄携へ來つて、幼時より食堂の味を仕込むものも少なくない、甚しきは食時の刻限にあらざる間食としての來客も相當仰山にある。勿論客種は大衆的で、立派な紳士や淑女はないが、現代の民衆が先を爭ふて食堂を漁さり、美味に酣溺する狀態は恐ろしい位のもので、皿ホークの響き囂しく、食中高談放話の雜音亦耳を擘ざくばかり、此等の大衆は皆各々家庭の無いものはない筈である。何故家庭で食事をせぬのか、何故餘り旨くもないものに、相當高い金錢を拂つて食堂に蝟集するのか、一人々々に當つて

聞いては見ないが、蓋し家庭の食餌がまづいからの事であらう。

食堂に於ける大衆飲食の狀を視るに、恰も餓えたる猿の木ノ實を貪るにも似て實に淺間しい位なものである。總じて現代人が食道樂に墮するの傾向あるは勿論民風の廢頽之をして然らしむるにあるも亦一方家庭に於て一家の主婦たるものが、日常大切なる調理按排に注意せざるの罪と思ふ制服正帽の學生など大部の顧客であらうが、學生の分を以て無益の贅費を食堂に濫用するはい、又學生輩が到る處の喫茶店に幅をきかせ、コ、アを持つてこい、ケーキを呉れといふのも、積り積れば月に年に相當の浪費となるであらう。渴を醫するは水道の水でも呑んで居れば澤山である。甚しきはビールに醉つて、三々五々街頭にデッカンショーを唸鳴る連中も少くない、亦以て教育の有りがた味を感ずるのである。又各食堂が食品を陳列して來客の食旨をそゝるなど一種賤陋の念が起きる、要するに優雅を尙ぶ日本食膳の儀禮ではない、殊に陳列の標品は、いかにも旨さうに見せて實は見本と相違の劣品を出す食堂の欺僞的行爲は取締るべきであるが、第一に斯かる無益の贅物は斷然禁止するが捷徑である。

教育の事は國策中に於て百年の大計に屬する最も大切なる問題である。橋田文相は教育家の出身であるから、平素の研究と蘊蓄を傾けて今や著々之を實行に移して勵行せらるゝであらう事を切望に堪へない。憶ふに小、中、大學を通じて刷新を要する案件は非常に多い事と思ふが、我等は第一に死教育の弊を矯めて活教育に改むれば、義務年限とか、在學年數とかを從來より延長する意見には贊成出來ない、寧ろ貴重の青春を長く學窓に消磨させることは、弊害多しと思ふのである。又實に國家人物經濟の得たるものではない。

次に教育の精神が皇道の扶植にありとすれば第一師範教育の改正に重きを置くべきは不及申、大學に於ける學匪異端の教師を掃蕩することは急務中の急務であり、自由主義だ、民主主義だ社會主義だマルクス主義だヅボラ主義だといふ連中は今日でも高

等學府には可なり潜在し若くは跳梁して居ると思ふ、我が皇國には唯一つ日本主義があるのみだと云ふ原理を徹底せしめて此際抜本塞源的に下らぬ西洋カブレの惡思想を放逐して了はねばならぬ、皇道日報の同人が告發中の不敬漢大川某に對する當局の處置はどうしたものか、不可思議千萬の取沙汰を聞くが、近衞首相は迅に該問題に對して糺彈の道を盡すべきである。終りに些々たる小問題のやうだが、妙齡の女子の間に流行する雀巢的頭や、變挺な服裝は教育界の範圍内に於ても矯正することは容易と思ふが、女子の斷髪は嚴令一下之を禁止して輕佻浮華の習俗を一掃することに努めねばならぬ、總じて青年に質實剛健の氣風地を拂ふと見えたる今日先づ妙齡女子をして迷夢より覺醒せしむる必要がある。

民衆の娯樂は映畵に如くものなかるべし、若し能く取締れば一種の社會教育上效果少なからざるに反し之を放任すれば弊害多し、ラヂオの如きも文明の利器とは云ひながら朝から夜までノベツ幕なしに騒ぎ立てられては病人、讀書、靜思、會談等の妨害多く心あるもの耳を掩はずには居られぬ、何んと云ふ唄だか、何んと云ふ鳴り物だか知らぬが、日本人の聲でない變挺な俗謠と、急調苛烈なる音曲の響き、浪花節、其他野鄙なる演藝は日本的情操を傷ふものなれば今スグに禁止してもらひたいと思ふ、到る處の食堂又はアル向きの商店など、高聲のラヂオで會話の邪魔をされ、物を食つても氣が落付かぬ、一體客人は皆之を好むかと、聞いて見るとヘイ若い方は皆さんお喜びになりますと云ふ、あゝ病既に膏肓に入りて度すべからざるかと歎息せざるを得ぬ、今日の青年輩は大和文範とも云ふべき優美の淨瑠璃などは馬の耳に念佛で、俗惡なるラヂオの樂聲に陶醉して居る、そゞろ憐むべきである。

日本人は素質が善いと云ふが、自分さへ善ければ人はどうでも構はぬと云ふ風があつて人と共に入浴する作法も知らず、我れ勝ちに湯口を占領してソコを動かず、直立したまゝ頭から湯を冠つて傍人に飛沫をかけても平氣である。そんなら讀書子學生はどうかと云ふに、圖書館を見れば己れ一人で索引簿を占領して他を顧みず、汽車、電

車に乘るにもバスに乘るにも、横から〳〵と割り込み人を突き飛ばして我れ勝ちに進むと云ふ風である。一般民衆が今少しく訓練があるなら多人數群集の際にも左まで混雜はなからうかと思はれるに、度し難い奴輩である。こんな小事は何も時局問題ではないがツイ、平日の不平が爆發するのである。

最後に宗教といふ大問題に就て一言して見やう、政治屋はあるが政治家がなく、教育屋はあるが教育家がなく哲學者はあつても哲學家のないやうに、宗教學者はあるが宗教家がないのは情けない、今の所謂既成宗教は先づ佛教を擧げねばなるまい。今日の寺院、僧侶が僅に宗教の形骸を維持するも、その精神を發揮して人心濟度に權威あるもの果して幾何あるか、學校に出入する少青年は不及申、高級の教育を修むれば修むほど宗教とは沒交渉の地に立つて自由奔放、心の駒の狂いほうだいで、苟も信念の何物たるかを知るものは稀である。我れと思はん宗教家は此際此秋、新國策の波に乘つて人心陶冶の天職に身命を捧ぐる氣はないか、たゞ日本民族は素質が良いといひ(餘り當てにはならぬ)第一神の御裔と生れて、皇道國體下に溫藉渾厚の發達を遂げて居るので宗教の衰頽今日の如くなるも、尚ほ禽奔獸遁に陷るまでにはならない。抑も神道に淵源する日本主義は日本國民の安心立命地を指定するもので、宗教でも哲學でもないが、大和民族三千年の歷史的檢證に基づける實踐的道德の原理である。我等は之を以て宗教を超越せる一大國教と申すのである。是れ宗教なくも猶ほ有るが如きものの橋田文相は此點大に研究を要すべき問題ではあるまいか。

明治天皇御製

白雲のよそにもとむな世のひとの
　まことのみちぞしきしまの道

ともすればあらぬかたにとふみ迷ひ
　をしへがたきは人のみちなり

# 聖戰明徴と皇國の使命（上）

（後篇）

吾輩は斷る迄もなく、操觚者でも文士でもない、又評論家を氣取る者でもない。唯一片耿々とやら正直正銘憂國の至情に於ては何人にも遜らぬ積りである。此點、人は知るまいが文字通り眞に寢食を忘る丶結果、時に廻らぬ筆を呵して悽慨悲憤の氣を吐くだけの事である。

第二次近衞內閣の出現を迎へて、本紙上に愚見を開陳せること十三回に及んで居るが、御高見を拜聽して有り難いと云ふ禮狀も來ないが、獨り吾輩ばかりでなく、いかに天下の名論卓說でも、夫子位を得ずんば施すに由なく、何と云つても政府の實權に俟つより外はないのである。故に前稿に於ては御無禮ながら政治の貧困を歎いて當路



の奮起を促したのである。それは極めて抽象的ではあるが、要するに今、國民は上の政治を謳歌しては居らない、お世辭にも讃美して居るとは申されない。開闢以來の國難だといふのに、國民が信賴し能はぬやうな貧困な政治で何が出來るかと云ふのである。果して然らば一日も早く、政府は國民の信賴を博するの道を取らねばなるまい。國民の信賴を博するは國民の輿論を採用する事である。今日の輿論は確乎不拔の國是に基き既に業に研究し討尋し盡したる熟慮の二字を。速に斷行の二字に移すだけの一時に存する。何の暇か新體制だ、翼贊會だ、臣道實踐だ、國民組織だと異を立て奇を衒ひ眼前に焔々たる猛火を消すに役立たぬ悠長千萬の詮索に沒頭するの必要あるかと云ふのが吾輩始め心ある國民の誰もが了解し能はぬ論點である。舊來の陋習を破り天地の公道に基づくべしとは夙に五ケ條の御誓文に宣らせ給ふ所である。惡い事はドシドシ改めて天地の公道に遵つて實行さへすれば、今更新體制も何もないではないか、教育勅語御渙發五十周年の今日、朝野官民擧つて聖旨の貫徹に副うて居たなら、今更

改めて臣道實踐を叫ぶの要もあるまいと思ふ、教育勅語の聖旨を遵奉する國民なら、大政を翼賛せぬ奴はない筈である。曩の勅教を實行せぬからと云つて、ソノ聖旨に劣た新法を其れからソレと作つたら際限はないではないか、一利を起すは一害を除くに如かずで、ソノヒマに聖旨の普及貫徹に全力を注いだ方が增しである。

皇紀二千六百年の祝典に方つて、降し給へる聖詔を拜讀したなら、一日も早く貧困政治の譏りを拂拭するの道を講ずべきである。勿論思を神武天皇の創業に馳せて今度の聖戰を敢行して居る次第ではないか、さすれば聖詔宣ふ所、益々國體の精華を發揮し、時艱の克服を致し、國威の昂揚に勗め、以て祖宗の神靈に對し奉るほどの急務はないのである。重慶に對する膺懲の皇軍が相當の戰果を收めて居る一事は中外の等しく認むる所たるは言ふ迄もないが、併かしながら事變以來足掛五年、抗日侮日の敵勢は依然として舊の如く、朝野を擧げて國難來を絕叫しつゝあるの今日、果して何が益々國體の精華を發揮し、何が時艱の克服を致し、何が國威の昂揚を顯現したか、寧ろ



祖宗の神靈に對して御不安の念を懷かせ奉るの現狀ではないかと恐るゝ次第である。幽玄の神靈は姑く措き近衞首相は、今上の御軫念を拜察して恐懼に堪へず、此れ皆予が責任なりとの誠意を披瀝して他を感激せしめたのも、實に僞らざる首相の赤心であらう。果し然る以上は、首相たるもの速に蹶起奮勵し、一死以て陛下の御軫念を安じ奉るの方途に出づべきである。惡い事は申上げませぬ急がぬ問題はアト廻しに附し、既に悠長に失せる時艱克服の急務に向つて全力を傾注せられん事を願ふの外はない。此れ吾輩草莽の徵臣、國家の明日憂慮措く能はずして、敢て忌憚を省みず、罪鼎鑊を甘しと爲して玆に進言する次第である。諄(クド)いやうだが。又昨年九月二十七日宣諭あらせ給へる聖詔は、世局の騷亂底止する所なく、生民の蒙る苦衷を憐ませられ、一日も速に禍亂の戡定平和を祈らせ給ふの餘り、三國間の條約を結び給へる大御心のほど畏き極みと存じ奉る。玆にも亦益々國體の觀念を明徵にして、非常の時局を克服し、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしと宣らせ給へり。

# 聖戰明徴と皇國の使命（下）



一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしとは半世紀前に於て教育勅語の示し給ふ所、今更聖詔を煩はし奉るも眞に恐懼措く能はざる次第である。斯くの如く屢々聖慮を累し奉るは、畢竟政治の成績擧らざるが爲めなるは、言ふ迄もなき所なれば、閣臣なるものは唯一筋に如何にして聖慮を安んじ奉るべきかを念ひ、聖旨諭させ給ふ所に格遵して、速に國體の明徴を圖り、國威を昂揚し、時艱を克服するの急務たるを悟り折角三國同盟を結んだからには、ドシ〳〵同盟の效果を收むるやうに既定の經綸を實行に移して、上は聖旨に答へ、下は一億國民の信望を篤からしめねばなるまい。

憶ふに、眇たる吾輩の如きすら、夙夜寢食を忘れて憂惧に堪へざる程なれば、賢明なる廟堂諸公がいかで之を念はざるの理やあるべき。唯惜むらくは諸公斷の一字に缺くる所なきか、抑も何故に其の斷ずべきを斷ぜざるか、其の病因一にして足らざるべきも、要するに煩瑣の政治をして益々煩瑣に陷らしめ、平地に波を起していやが上にも時勢を繁縟に導くの弊に墮し、以て大事を斷行するの機會を逸し去るにあらざるきか。總して國家の樞軸を握りて、經綸を行ふべき閣僚諸彦にして、日日の劇忙文字通りに寸隙なく、假令ば登廳して其の椅子に安座するの時間は極めて少なく、東奔西馳席暖なるに遑あらざるは今に始めぬ一つの宿弊である。餘裕綽々とまでは行かずとも、今少しく落付く工風をせざれば、到底上分別など起る謂れがない。吾輩は先年文部省に某大臣を訪問する毎に、いつも不在といふ。滿皿ウソでもないやうであつたが、一家の主人、イヤ一省の大臣たるものが、ノベッに留守にし、果して曠職の譏りはなきかと秘書官を詰つた事がある。今日問題になつてゐる大政翼贊會の性格とか運用とかに就ても幾多の疑義があるとかいふが、識者の間にすら疑義を抱かせるやうな曖昧

な機關を設けて、研究解釋に貴重の日子を費すが如き、徒らに政務の繁雜を來す所以ではあるまいか、而も忠良臣民孰れか大政を翼贊せざるものやある。今日は唯一意專念、時艱の克服に邁往勇進するの一事あるのみと吾輩等は確信する、イナ一般國民は皆左樣に念願せぬものは一人もないと斷言して憚らぬのである。

此程某團體の招待で、現地から歸還した某海軍中將の講演を承つたが、支那事變は今後マダ七年半は掛かるといふ。オドカシちやあいけねえ七年半掛かつてタマルものかと思つた。特に半とは何んぞや、こんな愚にも付かぬ問題は、どうでもいゝが、今後將政權を屠るに、凡そ何年を要するか、其の策戰方法は如何ん、といふ國民の質問に當局は答へて宜しくはないか、何も軍機の秘密とやらで、國民と共に戰ひつゝある聖戰の前途を示唆せざるは軍部大臣の無責任と云ふも過言ではあるまい。總じて今の政治が民をして知らしめざる主義のやうに見えるは、非常な時代後れである。ソノ癖、依らしむるに足る的確不動の政治を行はざるは愈々以て話しにならぬ。勿論時艱克服とは單に支那事變を指すものでなく、世界の動亂を鎭め平和に貢獻して聖戰の意義を徹底し、皇國の使命を完遂せんとする大業を含むのであるから、獨り重慶を屠つたら能事了るといふではない。此點から見れば前途は相當に遼遠であるべき筈だが、聖戰の延長だけは此際電擊的に猛進して、一日も早く其效果を收むる必要がある。ソレは唯斷の一字である。

松岡外相は今後五十年の後には、米國をして日本の眞相を悟らしめる時が來るだらうと言明して居るが御尤もであり、ソレは所謂建設の域に入るのを言ふのであるから、五十年は愚か、百年の後でも差支はない。日本が今日の國運に到達したのも、申さば二千六百年の歲月を經て居るから、米國が我が皇風を仰ぐに五十年や百年では早い方である。唯一時破壞的聖戰の工作だけは、一日も早く克服の目的を達成せねばならぬ、ウンと聖戰の威力を發揮して、打物取つては地球面上日本に敵する國はないと、世界の隅々にまで覺悟させることが最も急務で最も必要と知らねばならぬ。長期戰爭で苦

しめたら、日本は参つて了ふとは彼等の根本的策戰であるが、此上長くドンチャン騒ぎに暮らすやうでは、彼等の思ふ壺とは聊か其の趣を異にしても、結局物資や經濟の苦痛を別にして種々の故障が起り、氣の短い日本人は到底我慢が出來ず、どんな不祥事が突發することないとは、誰れが保證し得やうぞ、災ひ外に在らずして患ひ內に生ずるとは古來最も恐るゝ所である。以上序說に代へて其の思ふ一端を吐露したに過ぎぬが、次回結論に時艱克服の原理と信ずる一篇を公表して博雅の叱正を仰ぐつもりである。

（一六、二、一三）

明治天皇御製

すゝむべき時をはかりてすゝまずば
あやうき道に入りもこそすれ
くにといふくにのかゞみとなるばかり
みがけますらをやまとだましひ

# 日本主義

（高山樗牛）

**日本主義**は國祖を崇拜して常に建國の抱負を奉體せんことを務む、我國民は公明快濶の人民なり、有爲進取の人民なり、退嬰保守と憂鬱悲哀とは其性に非ざるなり。

**日本主義**は光明を旨とし生々を尙ぶ、是に於てか、夫の退讓を重んじ、禁慾を訓へ厭世無爲を鼓吹するもろ〳〵の教義を排斥す、億兆一姓に出で、上下其の心を一にし、內に臨みて棣萼相親しみ、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我國體の萬邦に冠絕する所なり。

**日本主義**は平時にありて武備を懈らず、愈々國民的團結を鞏固にせんことを務む、然れども、妄りに己れを樹てゝ他を容れざるものに非ず、國內を修めて海外に臨み、與國と共に永遠の平和を享受せんことを希ふ。

**日本主義**は世界平和の維持に努め、進みて人類的情誼の發達を期す、而して我國民の大抱負を實現せんとするにあり。

**日本主義**は今日吾等の創造したるにあらずして國民が三千年の歴史的檢證に基づける確實なる自覺心の最も明確なる發露に外ならざるなり、其の由來するところ深く國民の特性に根據し、遠く建國の精神に淵源し牢として拔くべからず、夫の漫然外敎を借り來りて、餘飾補綴せるものと、素より同一の論に非ざるなり。

**日本主義**は大和民族の抱負及び理想を表白せるものなり。

**日本主義**は日本國民の安心立命地を指定せるものなり。

**日本主義**は宗敎にあらず、國民的實行道德の原理なり。

廟堂諸賢に進言して、重大經綸の實行を願はんとするもの唯此の本篇(結論)に存す。但し前篇に同趣旨の結論あるも、重複のお斷りは先刻凡例に記する所の如し。

草莽微臣　月出東山

# れど八紘一宇の皇謨あるのみ（結論）

## （根本的世界騒亂の克服）

吾輩は前回の二稿に於て今日の計たゞ速に時艱の克服に邁進するの一路あるのみと論じ、忌憚なき進言を政府に提唱したのは烏許（オコ）がましいが、國民の聲を代表した積りである。政府にして悠閑不急の問題に沒頭することを一時お預けに附して、當面の時艱處理に電撃的全力を注ぐならば、忽ち倦怠せる民心を刺戟刷新して、一億國民總立ちとなり、期せずして大政翼賛の實を發揮し、兎角不信不滿勝ちであつた政府に對する民心は一齊に其の英斷を謳歌するに至るであらう事は請合である。國民が時の政治を讃美し謳歌してこそ、玆に始めて大業成就を期すべきなれ、此れ二言となき眞理である。

抑も時艱とは何ぞや言ふ迄もなく世界の變局と底止する所なきその騒亂を指すのであつて、獨り支那事變に止らざるは、小學の兒童でも知つて居るが、唯玆に論議せんとする問題は我が皇國の立場よりして、果して如何にその時艱を變理すべきかに存するのである。此の經綸になると今以て政府にも斷乎たる成算が無いのではあるまいか、何んとなれば、常に既定の方針に向つて云々と公言せられるが、果して既定の方針があるなら、速に之を實行に移すべきであるに、概して國民をして政府の煮え切らない態度に失望せしめつゝあるのは遺憾至極に思ふ。

軍機の事は素人には分らぬにせよ、つら〳〵常識的に考へて見ても、一個の蔣政權を相手に、足掛け五年、牛刀雞を割くにも似たらん大軍を動して未だに埒の明かざるは如何なるワケに由るか、前回にも某中將の講演を引いた通り、假りに今後尚ほ七年半は掛かると云ふが如きは、民心を腐らすも甚しい話ではないか。今は既に南京政府も立派(?)に成立し支那の主權者として禍亂戡定の責任もあるべき筈、一方の蔣さんは僅に一偏隅の政權として辛くも餘喘を保つに過ぎぬ、首魁渠(カレ)を生擒して東京に護送する位は、モハヤ一勇士の事のみとさへ思はるゝに、戰意も喪失して居る廣漠たる各地の殘敵を掃蕩するに、貴重の犧牲を吝まざるは差引戡定隨分割の惡い話ではないかと思ふ。每々敵の遺屍一萬五千などゝ我が戰果の大なるものあるは否定せぬが、いかに頑冥不靈の敵とは申せ、無辜の天民を虐殺するは皇軍の本意とも思はれない、彼(レ)等は何んの爲めに戰ふかの理由も知らざる愍れの人足である。孟子にも敎へざるの民を殺す之を虐といふとあり、吾輩は事變の張本人たる蔣を惡むは勿論だが、聊か顧みて我が日本の姿を正視するとき、我れにも亦此の事變を誘發したる一面の罪はないか、今玆に之を細論するの時宜でないから省略するが、東亞の盟主を以て任ずる我等同胞は、一言一行以て彼(レ)等の心服を購ふに足るの修養を忘れてはならぬ、彼れ此れ鑑むる所もあり、我が所謂聖戰の精神より見て、今後成るべく無辜の殺生を控えてたゞ纔(マッシ)くらに蔣の巢窟を屠り、一日も早く渠(カレ)と宋美齡を生擒して東京に送致すれば、ソレ

で眼前の時艱はお了ひである。牝鷄の晨するは何んとやらで、女のクセに生意氣千萬な奴だが、蔣も成るべく殺さずに相當長く臭い飯をくわせ、灰を呑んで改悛させる方針も亦一法と思ふ。一寸伺ひますが某中將閣下よ、矢張今後七年半と二ヶ月も掛らねば、蔣の成敗は出來ませぬか。（呵々）

冗談じやないせ、電擊的猛襲を以て、一日も早く重慶を屠ると同時に、三國同盟の誼を强用して凛乎援蔣の罪を糾し、獨逸と共にお近い中に大英帝國を敲き付け、積年に亘つて東洋に爪牙を恣まにせる彼レをして爾に出づるもの爾に歸るの因果を思ひ知らせるは、世界的騒亂を戡定する我等同盟國當然の雄圖であらねばならぬ。又一方速に我が南進策を遂行して東亞の平和を鞏固に築くことは、憚りながら皇國日本の一手にお引受申すで御座らう。次に昨今の問題たる米國の亡狀は王赫として玆に怒るの程度に達して居るが若し一、野村大使の獻身的努力によりて、覺來なくも前非を悟り神妙に反省して翻然友好尊重の軌道に乘り來らば、兩國の幸慶は申すに及ばず、世界人道の爲めに結構とすべきだが、嘗て松岡外相の放言せられた如く、到底話して分らぬ相手であるなら、聖戰の手前遠慮會釋なく膺懲を加へる迄の事。此等の經綸を仔細に述ぶれば其の說や頗る長く、殊に吾輩の喋々を竢たずして世界の大勢は既に先刻御承知の通りである。唯ソ聯は聊か關心すべく思想上我が國體と相容れざる物騒千萬な相手なれど、我が同盟の獨國と既に訂約の關係もあり、少々臭くも、そつと蓋をして置けば可なり。萬一我れに不逞を加へ來らば、是れ亦聖戰の血祭りに供する迄の事、之を要するに皇道正義の日本民族は君國の爲めに死を鴻毛の輕きに比し、全くの文字通り最後の一兵となるとも屈せざる神裔の赤子なれば、ヨシ世界一束になつて御參んなるとも、千戈相見るの一點に至ては天下無敵と謂ふべく、復た何をか懼れ何をか憂へ、何をか惑はんやと心得て然るべしである。

論者口を開けば未曾有の國難だと云ふ、然れども斯く觀じ來れば國難何物ぞ、堂々たる日本民族の抱負は進んで世界の國難を濟度せんとするにあらずや、高の知れたる

國際一部の葛藤に遭遇し、分らず屋のワイ〳〵騒ぐを未曾有の國難など、悲鳴を揚ぐるは、自ら省みて恥づかしからずや。吾輩は獨りヨガリの影辨慶を氣取つて一時の快を貪るものではない、今日の日本民族は斷じて斯かる弱音を吹くべき者ではないと固く信じて疑はぬのである。

夫れ世界の大勢既に茲に至る、遅かれ早かれ、既定の筋書通り歐洲は獨伊に據り、東亞は日本に依りて平和の天地を招來し、目出度く舊秩序を修正して新秩序の建設を見んことハヤ眼前に彷彿たるの感を覺ゆ。但し今後七年半掛るか、十年で片付くかは神ならぬ身の知る由もないが、蓋し成せば成る、成さねばならぬものと知れ、成らぬと云ふは成さぬなりけり、天下成敗の訣たゞ我等の努力如何んと顧るのみである、

借問す世界の變局右の如く首尾能く截定せば、是を以て時艱を完遂したと言ひ得るか、否々ソハ唯一時の彌縫のみ、決して永久の平和を期し得るものではない。請ふ坐せよ吾れ汝に語らん、エヘン其故如何ンとなれば、優劣相戰ふて優者勝ち劣者敗るは



知れ切つた事なり。その敗れたるは力足らざるに由る、實に心これに服したるに非らず、故に敗者に於ては其日から臥薪嘗膽の臍を固め、己レクソ！と異日頽勢の挽回を待つて必ずや報復を圖るであらう。又科學の進歩は何時（イツ）いかなる新鋭の兵器や神變不可思議なる戰術の發明も起らぬとは限らぬ、從つて弱國また永久に弱國で甘んずるものでなく、必ずや時節到らば蹶起せんと願はぬものは有るまい、詮ずる所、他の弱小を欲して己れの強大を圖らんとする自利的排他的の妄念を逞うし得る機會あらば、之に乘せんとする本能的國際の鬪爭慾は、猶一團の肉を繞りて群犬の猛々たるが如く、所謂春秋義戰なきもの比々皆然りと爲すこと古今歷史の物語る所なり。獨り我が神州正義の日本のみは、尚武の氣象ソノ天稟に出づると雖も、至仁至慈なる惟神の大道に育まれ、故なくして武を用ゐることなし、卽ち兇暴を挫き不逞を懲らす正當防衞の必要なくして濫に兵を動かしたる例（タメシ）はない。近くは日清日露の戰役より朝鮮の併合、滿洲獨立保護の義戰に至るまで、一として皇武獨特の發動にあらざるものは無い。又今

次支那事變の如き、今更玆に聖戰たる所以を說明する迄もなき所である。

是に於てか倩々時艱克服の原理を探求するに、將來永久に國家の不祥事、生民の迷惑たる功利私慾の戰禍を根絶するの道を講ずるより外に眞正の克服は有り得ないと信ずる。然らば則ち眞正の解決方策は何かと云へば、世界の騷亂一通り裁定に就き、さしもの戰局玆に終焉を告ぐるの機會を以て、畏れ多くも我が叡聖文武　天皇陛下より全世界に呼び掛け給ひて、獸の相食むに等しき不正不義の戰爭を未來永劫に根絶すべき天理人道の大宣言を渙發あらせ給はんことを奏請し奉るの一事にありと誠恐誠懼深く思ひ遠く慮る次第なり。固より崇高雄偉、曠古の壯擧、無前の快擧、威神力の美擧なるこの聖詔は、中外に宣諭あらせ給ふものなれば、御聲明的大詔とも名づけ奉るべき御性格のものにて、申すも畏き極みなれども、全世界に向つて這般の理想を聲明する資格者は、我が皇國の　天皇陛下より外には斷じて之れ無く、隨つて聖旨を奉行して德化を四海に布き得るもの、皇國日本の外には無きこと多辯を須たざる所である。

唯玆に一つの不安は、所謂大聲俚耳に入らず、何分にも氏素性の懸隔ある彼等民族に至仁至慈なる我が皇上陛下の聖諭を了解せしむるの困難を思はざるにあらねど、苟も歷史有つて以來幾千載、人文の發達その頂點に達したらん如き今日、さしも頑冥不靈の連中でも、人間として獸の相食むに似たらん淺間しき鬪爭の恥づべきを悟り得ないの筈はあるまい。それよりは玆に最も戒心すべき一つの懸念は、綸言汗の如く一たび發すれば回收すべからず、萬一如上の一大聖詔を累し奉りて國務の實行之に伴はざる虞れあらんか、是れ盛德を瀆し奉るなり。故に斯かる非常の天業は凡庸內閣の能く負擔し得る所でないので、此點聊か考へられる。併かしながら幸に、賢宰良弼、朝に在りとすれば、區々吾輩風情の進言を竢つ迄もなく、必ずや獻替宜しきを得て、聖明に答へ奉るの日あらんことを刮目して相待つ外はない。

今玆に昨年九月二十七日降し給へる聖詔を繰返し拜讀するに「大義を八紘に宣揚し坤輿を一宇たらしむるは實に皇祖皇宗の大訓にして朕が夙夜眷々措かざる所なり而し

て今や世局は其の騒亂底止する所を知らず人類の蒙るべき禍患亦將に測るべからざるものあらんとす朕は禍亂の戡定平和克服の一日も速かならんことに軫念極めて切なり」と宣らせ。以て三國同盟の國是を明示し給ひ、次に「惟ふに萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむるは曠古の大業」と宣らせ給ふ。聖旨深雄皇謨宏遠、亦以て如何に至仁至慈なる大御心を拜察し奉るべきにあらずや。たとへ世界に向つて呼び掛け給はずとも、歐米具眼の士は、いかに日本の陛下が萬邦協和四海同胞の誼を敦うせんと軫念あらせ給ふ一端を窺ひ奉るものも無いではあるまい。前世界大戰の際、畏くも明治天皇の

四方のうみ　みなはらからとおもふ世に
　などなみ風の　たちさわぐらむ

の御製には、米國大統領ルーズベルトが感激して、媾和の調停に起つたと云ふではないか。彼等とて決して大御心の解せぬ謂れはない、たゞ解すまいと自ら良心を晦ますだけの事である。今日のル氏果して良心あるか。

時恰も皇紀二千六百年を迎へ、旭日瞳々國運發展の一大轉機に際し、盟邦獨伊と力を戮せて世界の平和を築き、天下蒼生の福祉を企圖する日本の大使命は、天運爰に循環し來りて、我が皇祖皇宗の神靈之をして然らしめ給ふものに非ざるなきか。若し此際此秋皇國負荷する所の大使命を遂行し能はずとすれば、恐らくは神命に背ける天譴として國運の逆轉忽ち踵を廻らすが如きものあらん。果して然らば世界平和の機運亦何れの日にか招來すべき、諄(クド)いやうだが、天實に世界の平和を必要する爲め、タマタマ端を支那事變に發して、皇國日本の奮起を促したるは、區々たる人爲にあらずして寔に神明の攝理たることを繰返して痛言する次第なり。

然りと雖も、唯我が陛下の御聲明的聖詔の渙發を仰ぎ奉るだけでは、皇謨の徹底を期し得べくもない、ソハ申す迄もなく、新たに國際聯盟を起して列國の前科的常習的とも云ふべき諸ろの放辟邪恣を規正し、同時に意義公明なる軍縮會議を開きて兇器を

封鎖し、あたら無益の兵備に無限の國帑を糜するの愚を撤廢すべきは喋々の辯を俟たざる所である。勿論聖旨宣示し給ふ所は我が惟神の大道に基き、其の大經大法を掲げて深く鑑み、肅然として矜持する所を知らしむれば足れり、其の要條細目に至りては閣臣各々其の主務によりて政治、軍事より文教、思想、經濟に至るまで日本皇道の軌範に則り、敷演啓發するを要すと雖も、聖旨奉行の大任は、便宜首相の名に於て之を說明するも亦可ならんか。

原來世界各國の元首を戴飾する本文の問題の如きは、宜しく各宗教家の奮起を促すべきであるが、今日の宗教家は羅馬法王でも到底其の資格がないから、この處宗教の領域には沒交涉とする。唯我が日本の皇道は、宗教を超越せる一大國教であるから、前にも述ぶる如く、此の天職を盡すべき權威者は、旁々以て畏れ多くも日本天皇陛下の叡慮を累し奉るの外はないと心得奉るべきである。

又、更に昨年十一月十日の聖勅を拜讀するに、其の後半節に「今や世局の激變は實に國運隆替の由りて判るゝ所なり爾臣民其れ克く嚮に降だゝし宣諭の趣旨を體し我が惟神の大道を中外に顯揚し以て人類の福祉と萬邦の協和とに寄與するあらんことを期せよ」と宣らせ給ふ。實に聖諭の如く世局の激變は國運隆替の判かるゝ所、進んで隆運を取らずんば退いて替運に墮するの外はない。故に此の千載一遇の好機に乘じて我が皇國の使命を遂行し、御聲明的聖詔の渙發を仰いで惟神の大道を中外に顯揚し以て人類の福祉と萬邦の協和とに寄與するは、正に此の一時にあること、毫も躊躇を容るゝの餘地がないと信ずる。

顧ふに、明治二十三年十月三十日、所謂教育勅語の降下ありて思想的國是の根本原理定まり、民心の動搖を既に崩るゝに廻す、實に古今謬らず中外悖るなき萬古不磨の實訓たり、今又未曾有の時艱を克復する根本原理として、更に如上謹述する所の聖詔一たび渙發せられて、德化全世界の隅々にまで光被するに至らば、啻に當面の世變を救ふのみならず、延いて未來永劫に亘りて中外萬邦渾然一體、始めて安心立命の指標

を得、長へに東方日本の神憲皇道を仰ぐに至るであらう。教育勅語一たび降下ありて復た焉に尚ふるもの無きが如く、本文の聖詔は空前にして絶後に及び、唯一たび渙發せらるゝに止まるべき大訓にして、其の神威は日月と光を爭ひ、天地に磅礴し、宇宙に映發して曳れながら皇祖皇宗の御聲を拜するの感あるに庶幾きものあらんか、伏して惟るに此の聖詔は、世界の蒼生を濟度する宗教的御功德に止らず、教育勅語と並び施して、政教百般皇道國體に依準すべき根本方則を欽定せらるゝものにして、國民の歸趨更に〳〵明確を加へ、大日本の國是は簡淨明潔昭々として一目瞭然鏡に對するが如けんのみ。果して此の如くならば、萬民一君を奉じて、たゞ此の國是に遵つて本分を盡し、政府は此の國是に基いて聖旨を奉行するだけの事、復た何を苦しんで餘計な政治を編み出すの必要あらんや。所謂法三章の精神に歸納すること、此れ皇道政治の本領ならんか。

以上述べ去り述べ來たる所、吾輩の提議は略々これにて盡くせり。嗚呼賢明なる廟堂諸公は、果して思を神武天皇の創業に騁せ、何を以てか宇內に冠絶する唯一無二の聖明に答へ奉らんとするか、今の時に方りて、區々[redacted]などの研究に沒頭して、皇國神授の大使命を閑却する如きあらば聖詔宣ふ所、眞に國運隆替の判かるゝ此際此秋を奈んせんやと忡々措く能はざるは國民一般の至情と思ふ。

終に臨んで一言す。爾來政府の重大國策として、高度國防國家の建設と云ふ標語を承るが國家の建設といへば百年の大計を指すことになる、吾輩は是迄も屢々論じたことであるが、高度國防は、當面の事變に處する國民の覺悟を促がすもので、永久の國策ではない。一旦聖戰を標榜して蹶起した以上は、飽まで萬全の勝利を博さねばならぬ。從つて聖戰の邪魔立てをする奴は、片ッ端から膺懲せねばならぬ。ソレには無限の軍貲を要する、國家興亡の問題だから國民は協贊を吝む勿れと云ふが、高度國防を擴充する趣意に外なるまい、又實に其通りで國民は擧つて二言もなく軍費の奉公に努めて居る次第である。果して然らば、屢々拜する今上陛下の聖詔イナ遠く皇祖皇宗の

大訓に基き、大義を八紘に宣揚し坤輿を一宇たらしめ、萬邦協和四海兄弟の誼を敦うする人類最高の思想をモットーとするに至らば茲に始めて高度國防の必要を認めず、世界列國お互に墻壁を撤して朝夕の寒暄を交はす事とならねばならぬ。故に世界平和の盟主たる皇道日本が高度國防國家の建設を百年の國策の如くに標榜することは將來チト愼んで然るべしと考へるが如何であるか。ソノ代り右の如く我が皇上の德化を八紘に布くソレ迄は、世界一束になつてご參なるもビクともせぬ軍備充實の覺悟を緩めてはならぬは勿論である。

次に神國日本位有り難い國はない。君民一家の國體下、所謂義は君臣にして情は父子の間に於ては何等の文句もなく苦情もないから、內治の事は世話なしであるが、唯外交に至つては聊か厄介なる重荷とせられて來た。戰爭には勝つても外交に敗れたとか外交問題起る毎に霞ヶ關は必ず若干の非難を受け、概して日本の外交はゼロだとの定評である。餘り香ばしい定評でもないが、吾輩をして言はしむればゼロでも何んでも構はぬ、所謂工作とやらが拙劣だと云ふのは寧ろ名譽の惡評かも知れない。抑も勿體なくも日本皇道の外交は一視同仁で、與國と共に恒久の平和を享受し、進んで世界人類的情誼の發達を庶幾ひ、率ゐるに我が國肇建の精神を體して神裔民族の大抱負を實現せんことに努力するもので、甲に厚く乙に薄く、丙に親しみ、丁に疏なるの理由なく、大國の鼻息を窺つて一喜一憂したり小國だとて之を輕侮したり、下らぬ問題に外交工作を弄する必要はないのである。今や曠古の世變に臨みて東亞の盟主は不及申、進んで世界の導師たらんとする皇道日本の霞ヶ關たるもの、須らく舊來の陋習を破り堂々たる神國大日本の自主的外交を樹立すべきである。（以下省略）

# 殘れる宿題

（重大研究）

月出東山

凡例に記する如く、吾輩の最も高調力説する問題は最後の結論である。此の一大論策と信ずる一篇を政府の參考に供して驗を他日に徴するの外、モハヤ憂國の議論は書かぬ積りである。唯一つ今後に殘されたる大問題は、世界に比類なき絶美至貴なる特殊の國體を有する皇道日本には又從つて世界に冠絶せる特殊の政治機構を制定すべきであると云ふのが卽ち是れである。



何んと云つても、泰西文化模倣の弊竇中に跼蹐せる時代に在つては、遺憾ながら、制度百般其の糟粕の産物たるを免れぬが、今や東亞の盟主として將た世界の導師として、我が皇道を四海に布かんとする日本がいつ迄も輸入的翻譯に甘んずべきではあるまい。此の問題は今後に殘されたる一大案件である。此の皇道政治の機構を編み出す事は、一朝一夕の研究で完成を告ぐべき筈のものではない、天下我れと思はん學者識者の奮起せられんことを祈る次第である。

415
61

昭和十六年三月二十五日 印刷
昭和十六年三月三十日 發行 【非賣品】

東京市澁谷區金王町九番地
著者發行人 月出東山
東京市荒川區日暮里町二ノ六一
印刷人 黒須澳治

發行所 壹誠社
東京市荒川區日暮里町二ノ六一番地
電話根岸(87)三七三九番
振替東京一九七二六番